

役立たずの徒花

お米ちゃん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

呪術廻戦の世界で転生（意味深）した主人公が、平穏な世界を求めて頑張るお話。味方みたいな性能のキャラを呪霊側に置いたら面白いんじゃない？と思つて書きました。

※1話目から残酷な描写があります。ご注意ください。

※初投稿です。至らない点が多々あると思いますが、暖かい目で読んでくださると幸いです。感想・評価・誤字指摘等を頂けると作者が喜びます。

目次

プロローグ	始まりの終わり	1
第一話	無縁塚	10
第二話	術式開示	17
第三話	山幸海幸	24
第四話	鎮魂家たち	32
第五話	供花観論	38
第六話	黄泉がえり	45
第七話	呪胎九相凶	53
第八話	起首雷同	62
第九話	神有月	70
第十話	わずらい	78
第十一話	柄遊び	86
第十二話	牛鬼、	94
第十三話	揺籃	102
第十四話	名残り	112
第十五話	平家の墮人	121

プロローグ 始まりの終わり

(いけると思ったんだけどなあ)

吉野順平よしのじゅんぺいや里桜高校の人間を利用して虎杖悠仁いたどりゆうじに縛りを促し、両面宿儺呪いの王を呪いの仲間に引き入れるという真人まひとの計画は、己の天敵であった虎杖悠仁や1級術師・七海建人ななみけんの存在により、失敗に終わった。だが得たものはある。己の新たな力、領域展開自閉円頓裏。そして何より、宿儺さえ復活すれば呪いの時代がくるという、確信。

(次はどう殺してやろうか)

回復を終えた真人は、どうしようもなく高まる殺意を感じながら、協力者の下へと向かっていた。

異常に気づいたのは、偶然。たまたま視界に入っていた鴉の群れが、突然直角に進路を変えた。

「何だあれ」

世の中には生き物を操る術式もあるが、その鴉たちは微弱な呪力しか纏っていない普通の鴉。何も無い空で、何かに遮られたような不自然な動き。真人は己の好奇心に身を任せ、『なにかある』空間へと向かった。

そこにあつたのは、四方20メートルほどの小さな藪。市街地のど真ん中で、そこだけが過去に取り残されたかのように、鬱蒼とした草木を残す。

(花御はなみが見たら喜ぶかな。それはいいとして…)

その空間を囲うようにして、張られた結界。

(この結界があるから入れない、というより空間の存在自体を認識出来ないのか。意識に干渉するから、ここに入るといふ発想自体無くなる。かなり高度な結界だな)

(…問題は、なぜ俺は認識できるのかってこと。呪力量か、あるいは俺呪霊だからか)

とりあえず結界に手を入れてみると、直ぐに異変は起きた。

侵入した部位が、四散していく。

「っ!!」

反射的に腕を引くと肉体の崩壊は止まった。

(結界の中が、俺とは真逆、正のエネルギーで満たされている。呪霊以外には認識できず、呪霊が入ると即座に祓われてしまうわけだ。流石に魂までは削られてないけど、これじゃ肉体の構築が追いつかないな)

(でも、抜け道はある)

懐から人差し指ほどの駒を取り出し、藪の中に投げ入れる。

無為転変。

圧縮されていた駒はその魂を解放し、概ね人の姿へと形を変えた。

(中から呪物の気配…石造りの祠、あの中に『ボス』がいる)

「祠にあるものを取ってこい」

指示を与えられた改造人間は祠の前に移動すると、観音開きの戸を開けた。

(守るよりも隠すことに特化した結界。呪霊以外なら、空間を認識は出来ないが侵入は出来る。なら改造人間をやらせてしまえば、後は楽勝だね)

正の呪力は、負の呪力で体を構成している呪霊にとって、致命的な弱点となる。酸の性質と塩基の性質がお互いを打ち消し合うように、正の呪力と負の呪力が中和し合う。

だが、これはあくまで呪霊の話。改造人間は呪力とは別に肉体があるので、正の呪力に触れても体が消し飛ばされることはない。真人はそこを突いた。

改造人間が戻ってくると、手に入れたモノを差し出す。

持っていたのは、一対の目玉。縦に長い瞳孔。紫と黒が入り混じった光彩。いつからあったのかは分からないが、かなり乾燥している。

「よおーしっ！特級呪物（推定）、ゲットだぜ!!」

真人は目玉を掴もうとするが、その手は力をなくし塵になった。

「ああ、そうだった」

呪物を持った改造人間に触れ、魂をいじる。改造人間は手のひらサイズの箱に変形し、中に目玉を納めた。

(…取り込ませる人間は、誰でもいいんだっけ？帰ったら夏油げとうに聞くか)

箱を片手にどうしたものかと思案すると、たまたま人間と目が合った。真人が「見られている」ことに気付くと、女も気付いて視線を逸らす。

「へえ、君……俺が見えるんだ」

ただそれだけの理由だ。

* * * * *

『呪術廻戦』という漫画がある。人間の負の感情から生まれる『呪い』を題材にした物語であるためか、残酷な描写や容赦のない展開が多く、主要人物や名無しモブを問わず人がポンポン死ぬ作風だったと記憶している。

私はその世界に、二度目の生を享けたらしい。

幼いころから、人には見えない異形が見えた。それを気づいたのは、4つになる頃。公園で友達だったチヨちゃんや遊んでいたときに、彼女の左足に憑いていたヒルのような何か、チヨちゃんや両親たちには見えていなかった。そいつが怖かったのと、皆に変な子と思われなくなかったので見えないふりをしていたが、次の日チヨちゃんは左足に大きな赤い斑と、大きくなった『それ』をつけていた。

その日から、私がいつも通っていた幼稚園に行くことは無くなった。

お昼寝の時間。それは突然体から無数の触手を生やし、子ども達を突き刺した。触手を付けられた人たちは血か肉か、或いは命を吸い取られ、二度と目覚めることは無かった。寝かしつけていた先生が異変に気付いて皆を避難させた後どこかに通報し、暫く経つと黒色のスー

ツを着た女とグラサンを掛けた強面の男が現れた。男が園内に入ったのを確認すると女は何かを唱え始め、空から黒い幕が降ってきて幼稚園は夜に包まれた。

その光景にどこか既視感を覚えた直後、私の中に、存在しない記憶が流れ込んできた。

呪術を用いて呪霊を祓う者『呪術師』。

人間の負の感情から生まれ、人間に害をなすモノ『呪霊』。

呪いを炙り出し、呪いを秘匿する結界『帳』。

嫌でも理解した。ここは呪いが跋扈する、『呪術廻戦』の世界なのだと。

読者だった頃の私ならば、現実にはない非日常や得体の知れない恐怖に、面白いと感じたかもしれない。空想の世界でどれだけの理不尽があろうが、大勢の人間が死のうが、『登場人物』がどうなるうが面白ければそれでいいからだ。だが鉄臭い血の匂い、助けてと叫ぶ子どもの声、チヨちゃんの腹の中でもぞもぞ動くそれは、紛れもない現実だった。私が今いるこの世界は物語などではなく現実だ。私は傍観者としてではなく、当事者として『呪い』を体験したのだ。

あの事件以降、中学生になった私は出来るだけ呪いを避けるように努めてきた。もしも私に呪術の才能があって、呪いを祓えるだけの力があれば、呪術師になる未来を選んでいたかもしれない。しかし、現実是非情だ。

だがこれでも、その他大勢の非術師よりかは恵まれている方だろう。呪いを視認する程度の才能はあるし、呪霊は「見られている」と感じた場合襲ってきやすいといった対処法を知っている。

私がこの世界に求めるものは非日常の体験ではなく、何の変哲もない日常、主人公風に言うなれば「正しい死」だ。呪いと関わる事なく、平和に生き延びる。『オモチャ』にはならない。これが私の、物語だ。

しくじった。

目で追ってしまった。アイツがいたから。くすんだ水色の髪。青と灰色のオツドアイ。継ぎ接ぎ顔の人型呪霊。

逃げ「へえ、君」

「俺が見えるんだ」

* * * * *

「おかえり。：おや、珍しいね。真人が生きている人間を連れているなんて」

真人の協力者・夏油傑げしゅうすけるは、一足早くセーフハウスに帰り、真人の帰還を待っていた。嘗て。バブル時代に熱狂した地方がりゾートマンシヨンとして建築した此処は、今では立派な廃墟となった。夏油達にとっても拠点の一つにすぎず、内部に積もった埃の量がその空白を映し出す。

「失礼だなー。生きている人間ぐらい、死ぬほど持っているよ」

「そうだった。で、君の描いた絵図はどうなった？」

「大失敗。でもいい経験になったよ。ついでに、面白そうなものも見つけたしね」

真人は意識のない女を床に転がし、夏油に箱を手渡した。

「何ソレ、獄門レブリカ彊？上手くないけど」

「いやそっちじゃなくて、その中身」

箱を開けると、中にあつたのは2つの目玉。

「：呪物だね。何処で手に入れたんだい？」

「藪の、祠の中で。街のど真ん中であつたよ」

「覚えがないな」

「呪霊じゃないと見えなくなっていたからね」

手に取るとそれは乾いており、放置された年月を物語る。

「反転術式と同じ、正プラスの呪力で出来ている。ただの呪物ではないな」

「でしょ？俺もそこが気になってき、それが何かを確かめたい」

「ヤバイやつかもしれないよ。受肉させるの？」

「勿論さ。あーでも、夏油がやってくんない？俺それ触れないから」
「いいよ」

夏油はそれを詰まらせないように気を付けながら、女の口に突っ込んだ。

「さて、何が出るか」

暫く待つが、何も起こらない。危険な呪物の中には器を選ぶ物もある。この眼も、その類だったのだろう。

「あらら、死んだ？」

「だろうね。取り出すか」

死体の胸を裂いて、目玉を取り出そうとしたその時。

「おい」

「！」「：おはよう。随分と遅いお目覚めだったね」

真人が問うと、死体は喋る。

「継ぎ接ぎ。何故、禁を解いた？」

「うーんと、人助けかな？」

「そうか」

女はふらりと起き上がり、机の上に胡坐をかく。

「：それは座るものではないんだがね」

「地に伏せよ」

「「やだ」」

真人は言葉を発すると同時に女に触る。

無為転変。

女の魂に触れ、その形を変えようとした。

(っ！防御されている!!)

無為転変は相手の魂を操作する術式。それを防ぐ手段は殆どない。だが女は「自身の魂の形を知覚した上で魂を呪力で保護する」ことで、無為転変を防いでいた。

次に女の呪力が溢れはじめ、空間を満たす。それは先の結界よりも

濃度は薄いのが、真人の身体を蝕み膝をつかせた。

「わたしは、嘘が嫌いだ。人助けで人を殺す馬鹿がいるか？二度目はないぞ」

「…君をもっと知りたいと思ったから」

「ほう、呪霊に口説かれたのは初めてだ」

だが返答に満足したのか、女の庄は収まった。

「いいだろう教えてやる。わたしは神だ」

「げとーこれヤバイやつっていうか、ただのヤバイやつじゃない？」

「さつき自分のこと人間扱いしてたよね」

「……………」

神。その形に答えを出すのは難しいだろうが、あえて言えば「とにかくスゴイもの」だろう。日本では、超自然的な存在や現象を「カミ」として崇拜、或いは畏怖し、現代でも、「とにかくスゴイもの」を「神つてる」とか「神作品」とか呼ぶこともある。この女は、どうだろうか。「君の名前を教えてくださいませんか？」

「…幸月。上は教えない」

「こちらも自己紹介をしよう。私は夏油傑げとうすける。で こつちが」

「真人まひと。人間への恐れから生まれた呪いだよ、よろしくね」

場の緊張感が和らいだところで、夏油は女を観察する。身長140cm半ば。腰まで伸びた黒髪。口角左斜め下にある艶ぼくろ。変わっているのは、やはり目。黒と紫、そしてごく微小の光の粒が、星の海を湛えるように、互いに滲み混ざり合っていた。

(…凄まじいな)

そしてそれ以上に気を引いたのは、圧倒的な呪力量。記憶を辿っても、これに比類しうるのは、乙骨憂太おつこつゆうた、祈本里香おりもとりかくらいのモノだろう。少なくとも、神ってるのは間違いない。

「起き抜けに悪いんだけどさ、俺の話に付き合ってくれない？」

「…まあ、聞こう」

「つまり、呪霊が人間に成り代わる世界を創るために協力してほしい、と？」

「話が早くて助かるよ」

「…いいよ。だが、真人。先に確認したいことがある」

「何でもどうぞ」

少女は口走る。

「お前らが呪いの世界を創った後で、わたしの世界を創るのは、アリか？」

「…君が初めてだよ。そんなこと聞いてきたのは」

「っふ、あつはははははっ！いい！凄くいいよ、それ」

真人から見た女は、傲慢不遜な唯我独尊系といった印象。確認の形を保つてはいるが、「当然だろ」という気を隠さない。『特級』を目の前にして、この態度。

真人の本能は、この女は危険だと告げている。だが「この女を自らの手で殺したい」という欲求も抱いていた。

今は、その時ではない。呪いの時代、その暁。この女を殺して、俺達^{呪霊}は永遠となる。

そして狙いは、もうひとつある。自分を神だと自称する少女の魂を、解き明かしてみたくなった。真人は人間観察が好きだと自覚している。魂の代謝に揺さぶられ、動くその様が大好きだ。この少女を観察すれば、魂をより理解出来るという予感。それに従ってみたい。

真人は手を差し伸べる。

「改めて宜しくね、幸月^{さつき}」

「…いきなり名前呼ぶ距離の縮め方キシヨク悪」

「いや名前しか聞いてないけど」

殆ど静観していた夏油だが、彼も真人と同じく少女の加入を認める。

「ちよつとお出かけしようか。どっちがいい？騒がしいところと、静かなところ」

「じゃあ、静かなところで」

「おっけー」

彼らはその場を立ち去り、暗い部屋に静寂が訪れた。

第一話 無縁塚

「…歓迎されている気がしない」

「10年ほど前かな。いろいろあつたんだ」

わたしの目の前に広がるのは、寂れた村。というよりそもそも人の気配がない。多くの家屋が何かによって破壊され、中には黒いシミがついている。

「では、これからテストを行う」

「必要？」

「必要だよ。何が出来て何処まで出来るのかを知りたいからね」

そう言うと夏油は懐から結ばれた縄を取り出し、その両端をぴんと張る。すると縄の隙間から呪力が溢れだし、一体の呪霊が現れた。

口元には一對の牙を覗かせ、腕には無数の膿疱が見える。そして腹には、模様の描かれた水晶のようなものが、抱えられるようにして存在していた。

「こいつは疱瘡ほうそう婆ババア。天然痘への恐れから生まれた、『特級特定疾病呪霊』だ。君には、こいつの捕獲とつきゅうとくていをお願いしたい」

「…特級とは？」

「ああ、等級の説明がまだだったね。」

こほん、とひとつ咳払いをして、夏油は口を開く。

「術師と呪霊は、その戦闘力や呪力量に応じて5段階の等級に分けられる。術師の等級は基本的に1級から4級までで、同等級なら呪霊より術師のほうが格上になる」

「ただし、この例外となるのが『特級』だ。特級にはそれ以上の階級がないから、この限りではない。理論上は、特級術師より特級呪霊の方が強い場合も考えられる。尤も1級呪霊が1級術師より弱い以上、呪霊側は特級に分類される最低ラインが低くなるけどね。」

更に夏油の話は続く。

「因みに、呪霊の方には2級と準1級の間には明確な区分があつてね。術式を持つ呪霊が準1級呪霊に分類される。…といっても、これが結構ザルでね。術式は持たないけど準1級相当以上の力がある呪霊を

2級呪霊に分類したり、逆に発動条件付きの術式持ちの呪霊を『窓』が術式なしと誤認して2級呪霊以下に分類することもあるんだ。だから、私はもつと低級の式神とか呪骸を活用して情報を収集するべきだと思うんだがね。ああ、『窓』とは呪いを目視できる非術師のことで――

「うーわ、始まった…」

呪霊の話をしていたはずだが、いつのまにか『窓』とかいう者について説明を始めてしまった。夏油は無駄話が好きなのかもしれぬ、と考えていたその時だった。

『領域展開』

* * * * *

「――まだ話の途中なんだがね。邪魔は、よしてほしかったな」
「いや話飛びすぎだし…」

そこは墓場だった。中々に規模があるようで、見渡す限り無数の墓石が建ち並ぶ。しかし何かおかしい。線香や手向け花の類もなければ、墓標に刻まれるべき戒名すらない。人が訪れた痕跡が、何処にも見当たらないのだ。

当然だ、此処は死者を弔う場所ではなく、生者を葬る『領域』なのだから。訪ねる人の、あるはずもない。

「！」

「始まったか」

突然、視界が暗転する。内側からは見えないが、何処からか現れた箱の中に閉じ込められた。

「墓」

瘡瘡婆が独自の言語で何かを唱えると、上から注連縄を巻かれた巨石が落ちる。

「三、二…」

死の宣告が忍び寄る。

「真人。あの子、死ぬと思う？」

「んなわけ」

領域に巻き込まれながら、まるで他人事のように会話をする夏油らをよそに、異変は現れた。

「呪霊つて案外優しいね。まさか埋葬までしてくれるとは」

ぴしりと墓石に罅が入ると、破裂したかのように飛び散った。中から現れたのは、先ほど疱瘡婆の攻撃を受けた少女と、鮮やかな絹織物。

「呪具だね。どこかから取り出したか、或いはその場で創り出したか」

にしぎのみはた
「錦御機」

わたしの正の呪力を流し込む。すると織物が勢いよく伸び、疱瘡婆の右腕を奪う。

「便利だね」

「うわーいたそう」

思わぬ反撃を受けた疱瘡婆だが、そこは特級。直ぐに肉体の再生を終え、再び必中の術式を発動させる。

しかし今度は、石が落ちてきた直後に棺桶から脱出した。手には、また同じ織物を持っている。

「棺桶の拘束は対象者が道具を持っていたなら、それも同じく埋葬される。だがそれが棺の容量を超える場合、入らない部分は分断される。となると、呪具を持っている部分に術式が刻まれているのか、将又切断されてもそれに同じ術式が刻まれるのか…」

「術式ぺらぺら喋るのやめてあげなよ、フェアじゃないよ」

容赦のない分析。

少女の手には何時の間にか刃の欠けた鋏が握られており、それを使って織物を切り始めた。…刃がひどく錆びついているので、切るというよりは叩きつけるに近いが。

その間も疱瘡婆は術式で女を攻撃するが女は意に介さず、墓から出てきては作業を続ける。幾つかに切り終えたところでそれらを手に持つ。そして手に呪力を込めるが、その呪力出力は先の比ではない。錦の奔流が、疱瘡婆を襲う。

流石の特級もこれには驚いたようで、見かけによらない謎の俊敏さを発揮し、何とか身をかわした。

「あつはっは、凄いな。でも、祓うのは無しだよ」

「…面倒くさいなあ」

言ってもも仕方ない。瘡瘡婆の術式を分析する。

先程の呪霊の動きから得た疑問。

(…………なぜ避けた?)

『錦御機』を分断すれば、分断された先までは伸びない。なのに棺桶を使わずにわざわざ避けた、その理由。わたしを術式対象にとれない理由があつたのではないか?そこを解き明かせば捕獲の手間がグツと省ける。

早速思考を廻らせる。

(単純に時間がなかった。しつくりこない。なら今までと何が違う? さつきは纏っていた呪力量の殆どを『錦御機』に流し込んでいた。もしそれが関係しているなら、たぶん呪力量。それも総量ではなく、呪力出力。さつきはわたしの呪力量が夏油か真人を下回っていたから、術式対象に選択できなかった)

(呪力量の一番多い対象を半自動で攻撃し、同時に対象にとれるのは一人だけ。うむ、それっぽい)

「となると身代わりは欲しいけど、問題ない」

「遺骸創術『開』」

わたしの足元に黒い沼のようなものが現れる。

手を上にやると沼が湧き上がり、それは生まれ堕ちた。

「人間…?」

今にも死にそうな人間だが、なかなか死ねないらしい。少女と同じ正の力が漲っている。そして少女の呪力量は、それより少ない状態を保ち続ける。

「まあもつか」

瘡瘡婆は必中の術式を発動させるが、棺桶に収まったのはデコイ。哀れな犠牲者は生前葬を余儀なくされた。

「夏油、これだけは言わせて欲しい。『早すぎた埋葬』」

「はははつまんな」

たつた今尊い命が失われたが、それでも命は増え続けている。

「身代わりはいくらでもいる。

…あとは分かるか」

わたしは疱瘡婆を中心に円を描くように移動し、間合いを詰める。その間も必中の術式は発動されたが、全て徒労に終わった。

「よし、完成」

わたしが出したのは身代わりだけではない。錦御機の術式を発動させながら疱瘡婆を中心に一周することで、円を描いていた。織物を握っているので、いつでも呪力を流せる。

「捕獲できたぞ」

「あーすまない。『捕獲』の定義を説明していなかったね。ここで言う捕獲は、『死なない程度に痛めつけろ』という意味だよ」

「夏油の長話なんだったの、ウケる」

「……………あのさあ……………お前ホント……………は……………」

もう術式は通用しない。知性の低い疱瘡婆だが、先程の身代わり戦法でそのことを理解していた。ならば、己の肉体で屠るまで。近づく女に拳を振るうが、それは虚しく空を切るどころか、空になった。

それは足を止めない。疱瘡婆の目の前に、それがいた。

「少し削るか」

* * * * *

「……………終わった」

呪霊の領域よるは解あけ、人間の夜が戻る。見下ろす先には、腕を失い腹を抉られた呪霊がいた。まだ息はあるようで、何やら呟いている。

「お見事。よく出来ました」

「……………何故、生け捕りなんて面倒なことを？」

「それでは、私の術式をお見せしよう」

夏油が瀕死の呪霊に手を伸ばすとその形呪霊は崩れていき、夏油の手に吸い込まれていく。

「呪霊操術。降伏させた呪霊を取り込み使役する。降伏させるのは私である必要はない。ま、ものついで、というやつさ」

「…呪霊の目の前でそれやるのは、デリカシー無さすぎじゃない？」

「呪霊っておいしい？」

「ねえデリカ」

「クソまずい」

「デリカシー」

真人は夏油の術式が気に入らない。それなのに、豚の目の前で生姜焼きを食べる男・夏油傑。味を聞く少女も少女だ。真人は心の中で夏油と少女の点数をかなり下げた。

「…で、何処まで分かった？」

会話を切り、夏油らに問う。

「そうだね…君の術式について、分析しよう」

「『遺骸創術』。生物無生物を問わず、失われたモノをあの世界から取り寄せて、その魂を基にあらゆる存在を復元する。『降霊術』に近いけど…君のそれは降霊術とは根本的に異なるものだ。まずは依り代の有無。降霊術には肉体か魂の依り憑く代物となるものが不可欠だが、君にはそれがない。依り代に肉体や魂を迎え入れるというよりは、魂を基に肉体を具現化している、というイメージかな。そしてもう一つが…」

「分かるかい？真人」

「『スワンプマン』か『本物』か。幸月のは後者だ」

「…根拠は？」

今度は真人が話を始める。

「通常の降霊術は『肉体の情報』か『魂の情報』をコピーするもの。でも、コピーであってアレンジではない。君のデコイ、馬鹿みたいな呪力量を持っていたけど…あれは、非術師。降霊術で非術師を降ろしたところで、呪力出力は増えない」

「それを可能にしていたのは、生まれながら肉体に課せられる縛り…『天与呪縛』に近いものだろう。知り合いに天与呪縛を持っているやつがいてね。君のデコイにはそいつと同じ、先天的な魂の欠損があっ

た。ま、君が意図したものかは分からないけど。その魂の欠けが、生
前以上の呪力出力を可能にしていたんだ。合ってる？」

「……………」

彼らに背中を向け、大きく息を吸った。そして、振り返り一言。

「知らんかった……………」

「ええ……………」

第二話 術式開示

青と白が、流れ込んできた。

「……海だ……」

「穏やかでいい場所だろう？ 私達はよくここで作戦会議をするんだよ」

暗く長い廊下の先、ドアを開けると海があつた。砂浜は白く、空は青く、森も青い。開けたドアが、熱された大地の熱気を運んでくる。

「早く締めなよ、皆待つてるよー？」

「……ああ、うん」

埃被った部屋。血濡れた廃村。そして、鬱蒼とした森の牢。暗い場所ばかり見てきたせいとか、やけに光が眩しく感じる。今は9月。やや季節外れの光景に見蕩れていると、待っていた真人がいつになく楽し気な声で急かしてくる。真人もこの空間がお気に入りらしい。

わたしは初めて真人に対し「気が合う」という感情を覚えた。

「遅いぞ、夏油！いつまで待たせるつもりだ!!」

「ごめんごめん。ちよつと紹介したい子がいてね。漏瑚なら、きつと気に入ると思うよ」

ビーチベットに腰を下ろす、小柄な影が見える。それは夏油の名を呼ぶ声の主であり、声色のせいか口調のせいか、幸月はその呪霊から短気な印象を受けた。頭部が富士山のようになっており、そこから湯気が立ち昇っている。先ほどの熱気は、この呪霊によるものかもしれない。

「…人間、それも、童^{わっは}か。弱者はいらん」

「まあ、そう言わずに。幸月^{さつき}、例のモノ」

夏油がわたしを呼んだので、その呪霊へ肩にかけていた鞆を差し出す。呪霊はそれを奪うように受け取り、チャックを開く。中には、絹の織物が折り畳まれている。

「……ほう、知らん呪具だが、退魔の類か。厳密には呪具とは呼べぬが上物だな」

「そういうの知ってるんだ。流石は呪具コレクターの漏瑚だね」

「ふん。正の呪力が込められておる、見ればわかるわ」

漏瑚と呼ばれた呪霊は鞆をビーチベッドの下に入れる。そして呪霊は、わたしの方へ顔を向けてきた。

呪霊の目は一つしかない。だがその目は、わたしの眉間を貫くような鋭さがある。

「…で」

空白の後、少しして向こうから話を始めた。

「儂の機嫌を取るために、ここに来た訳ではあるまいな」

「……………桁違いの富士山だな」

「あゝ?」

「漏瑚、怒るなよ。暑くなる。それに、子どもの言ったことだろうか?」
「つづ、一生使わないでしょ『桁違いの富士山』なんて。どういう意味?」

「いや、凄く強そうだなと思って。その…名前なんだっけ?」

「……………!? 貴様あの台詞だけで意味が伝わると思ったのか!? 分かるか!!」

人間の表裏を嫌う漏瑚だが、子供は幾分か純粹だ。悪気はない。しかしその素直さゆえ、時に裏のない残酷な言動をすることもあると、漏瑚はこの時学んだ。

「はあ……………儂は漏瑚。見ての通り大地の呪霊だ。先の質問に戻るぞ。貴様は此処に何をしに来た」

「?……………顔合わせ?」

「違う。何の目的があつて我々に協力するのか、と聞いておるのだ」
「わたしの世界を創るために」

「…正直なのはいいことだ。お前のことは、既に聞いておる。嘘八百を並べれば焼いていた」

「……………面接怖い」

「そういうのは言わんでいい」

突然の質問。ついノータイムで答えたが、逆に好印象を与えたらし

い。

「真人が認める以上、儂がお前を如何するつもりはない。だが、無能とは組みたくないのではな…術式を見せろ。お前自身もよく分からのだろう」

「——千年ずっと、寝てたから。忘れてることも、多い」

「へえ。君、平安生まれなんだ」

「…遺骸創術 『開』」

術式を発動すると、白い砂浜に黒い沼が浮かび上がる。沼と砂の境界では、黒が白を取り込むようにしてその粘度を増している。

「失われたモノを復元する、そういう術式だったね。具体的に何処まで復元できるか、その線引きを調べよう。それ次第で、君の役割も変わる」

夏油は懐から一冊の本を取り出す。表紙には、「呪術高専 喪失呪具記録簿」と書かれている。その本を開き、『黒縄』という名の呪具を指差した。

「まずは、どの程度から復元出来なくなるのか確かめる。『黒縄』は完全に消滅している呪具だ。…やってみて」

「了解。【黒縄】」

名を呼び、呪具の具現化を試みる。しかし、何も起こらない。

「…無理っぽい」

「はい、次はこれ」

次に夏油は、『天逆鉾』の具現化を指示する。

「黒縄の術式効果は『術式の攪乱・相殺』。具現化出来ないのは、『完全に破壊されているため』『呪具自身の術式が復元を阻害するため』の2つが考えられる。似た術式の天逆鉾で確かめよう。もし天逆鉾の刃が具現化できて、かつその術式が残っていれば、前者の仮説を確定できる」

「おっけい。【天逆鉾】」

その名を呼ぶと、沼の表面に波紋が生まれる。手を上にやると、それは出てきた。二又の短刀のようであり、見方によっては鍵のようにも見える。そして、どちらの刃も折れている。

「ふむ、剣としては死んでいる。…問題は術式の有無だな。試しに使ってみろ」

「夏油やれ。わたし出来ない。それ重い」

「…何故だ？肉体を呪力で強化すれば造作もなからう」

「呪力の肉体強化は、負の呪力でやるものだろう？わたしはそれが出来ない。正の呪力しかないから」

「無いとはどういう意味だ。正の呪力は負の呪力同士を掛け合わせて作るものだろう。」

「そのままの意味。正の呪力しかない、そういう体質」

「…信じられない？なら証明しよう。」

———にしきのみはた 錦御機の術式効果は『伸縮』。正の呪力で伸びて、負の呪力で縮む。…そして、正の呪力には『遊び』が設定されている。呪具自身の正の呪力で術式が発動しないためにな。だけど、負の呪力には遊びが設定されていない。それを踏まえて…何もせずに、錦御機を持つ」

わたしが手に錦御機を握る。何も起こらない。

「次に。夏油」

錦を夏油に手渡す。夏油の手にある錦御機は、端の方から少しずつ消えている。

「見ての通り、僅かな呪力漏出にも術式が反応する。」

これが、負の呪力を持たない証明だ」

「へえ、面白い体質だね」

「…成程な」

漏瑚は少女の特異体質を理解すると同時に、少女の思惑を理解する。

正の呪力しかないというのは、呪霊が相手なら正の呪力だけで消し飛ばせるので然程デメリットにはならない。しかし、術師…というより人間が相手なら致命的な欠点だ。正の呪力は人間の肉体を再生することは出来ても、人間の肉体を傷つけることは難しい。だが「わたしの世界」を創りたい少女には、人間は邪魔だ。故に、人間を害することに關しては他の追隨を許さない呪霊我らと手を組んだ。

利用されている。でも悪いではない。少女が人間に組しなだけで、人間側の力は大きく削がれる。

そして、何よりも、

(この童は、五条悟ごじょうごではない。…乗ってやるか。どの道100年後の荒野で笑うのは呪霊だ)

「話が逸れたな。夏油、剣を振れ。的は用意する」

【火礫蟲かれきちゆう】

漏瑚の頭部から、蟬と蠅を足し、人間の手を生やしたような式神が放たれる。それは夏油の前で止まり、蜻蛉のように滞空し始めた。

「そいつを刺せ」

「……え？大丈夫？爆発しない？」

「案ずるな、爆竹程度に抑えてある。術式が発動すれば、音もなく消えるはずだ」

「チツ」

「真人」

「何も言っただけ」

夏油が剣で蟲を刺す。すると、

「ババババババツ!!」

「——音、鳴るね」

「……何を確かめてたんだっけ？」

「黒繩を具現化出来ない理由。これで術式が発動すれば『完全に破壊されているため』で確定できたけど、発動しなかったね。…他の呪具で確かめよっか」

「わかった」

夏油から本を受け取る。本はあいいうえお順で呪具の名前と外見、また有る場合はその術式効果が記載されており、比較的新しい呪具は写真か絵が付いているが、そうでないものも多い。また大きなくくりで等級毎に分けられており、わたしは『特級』のページから、いくつか呪具の具現化を試みた。

「完全に消滅した呪具は出せないみたいだね。具現化できる限界が『破壊直後の状態』になってて、それ以上は具現化できないみたいだ」
「全部呪具として死んでおった。術式の死…というより『本来の機能の喪失』が、どうやら死の定義らしい。生き物なら、『生命活動の停止』
といったところか」

「」
絶句する。いろいろ出したが、その悉くが塵ごみだった。

…心なしか、漏瑚の目が冷めている。

「…ん？でもおかしくない？錦御機は？」

「ああ、確かに。あれの術式は生きてるよね。心当たりは？」

「……………はっ！え、錦？……………あーそういうえば、錦は最初から中にあっただな」

「…成程。今度は、その本を中に入れてみて」

「…入れる？沼に？……………弁償しないけど」

「それは困るな」

恐る恐る、沼に本を入れる。するとそれは、ずぶりと沼の底に沈んでいった。

「…どうやら現実のものでも、出し入れは出来るみたいだね」

「へえーすごい。頭いいなあ」

「ていうか入れたこと忘れるって……………もしかして、頭悪い？」

「寝ぼけてたんだよ！」

本の題名を呼ぶと、沼から本が出てきた。本に汚れは付いておらず入れる前と変わっていない。それを夏油に返す。

そして、真人達が下した術式の評価は……………

「まあ…便利っちゃ便利なんだけど、…何というか…」

「宝の持ち腐れだな。いや、宝だったものと言うべきか」

「君、今から呪霊にならない？武器庫呪霊って言うんだけど」

術式自体にダメージを与える手段がないため火力は術者の身体能

力に依存するが、幸月にそれはない。道具を使うにしても、出てくるものは我楽多ばかり。

要するに、弱くね？

「…言ったな？」

黒沼の表面が大きく波立つ。

「わたしの術式は、名前を呼ぶことであの世の魂をこの世に呼び寄せる。でもそれは、呼ぶ魂を指定したいときの話だ。指定しなければ名前を呼ぶ必要もない」

術式の開示。自身の術式情報を公開するという縛りが、術式効果を底上げする。

「遺骸創術 『開』」

黒い沼が、噴水のように物体を吐き出す。出てきたのは雑多な塵ばかりで、勢いもない。

だがどうにも数が多い。

「っ！止めんか!!」「これは……面白！」

漏瑚は火を放ち制止するが、止まらない。瓦礫は積み重なっていく。

「ほら、しゃーぎーい」

「……調子に乗るな！貴様のために言っておるのだぞ!!」

突然、塵の噴出が止まった。溢れていたモノも溶けていく。

ナハ

「……？」

ナハ

再度術式を発動させるも、発動しない。

ナハ

ナハ

『何を、している』

無貌の精霊が、そこにいた。

第三話 山幸海幸

不運は二つ。

一つは、戦闘経験の浅さ。呪霊が相手なら無敵に等しく、術師が相手なら無力に近い。故におよそ『勝負』と呼べる体験が少ない。

そして、もう一つは、

（術式が、解けた？…『術式の無効化』っ!!）

先入観。つい先程、似たような現象を起こせる呪具の存在を知った。呪術は奥深く、知識はそれを解き明かす手助けとなる。だが時に、知識は自由な発想の妨げにもなる。故に導き出された仮説。

（なら、正のエネルギーで打ち消せばいい!）

仮説の次は検証だ。あらゆる予測・仮定は、事実確認によつてその真偽が明らかとなる。少女はその点では筋が良い。

「本当に…申し訳ございませんでした…」

ナハ ナハ ナハ ナハ

ナハ ナハ

これである。背中に打ち込まれた呪いの種。それは急速に根を生やし5メートル程の立派な呪木となった。

『…私は自然を愛する者。愚かな児よ。何故、私が怒っているのか分かりますか?』

「…不法投棄?」

『その通り。貴方は、この海を汚した。他の人間と同じように』

語りかけてくる声は、病気の呪霊と同様人間の言語ではない。だが、意味は理解できる。少女はその心遣いに感謝しつつも気色悪いと思つた。

自然の守護者が今、裁きを下さんとしている。

不法投棄。山や海に捨てられた塵は環境を汚し、生物を侵す。全ての人間がそれをするわけではないと花御も理解しており、実際に幾分か自然に配慮していることも知っている。だが、愚かな児がいてはど

うにもならない。

因みに不法投棄は立派な犯罪である。環境省が公表している『産業廃棄物の不法投棄等の状況』によると、令和元年の不法投棄量は7.6万トンにもなると報告されている。

『もう気づいているでしょうが、その木は貴方の呪力を吸って成長している。貴方が呪術を使うほど、体に深く根を伸ばす』

「いやもう根を伸ばすって言うか…体通り越してるんですけど…」

正の呪力といえど、呪力には違いない。何度も正の呪力で掻き消さんとしていたが、それが良くなかったらしい。

『私は花御^{はなみ}、森から生まれた呪霊。貴方の名前は、結構です』

「……殺るつもりだ!?許してください!」

『言葉なら何とでも言えますね』

「もう呪術使いません!」

『いや、そこまでは……命だけで十分ですよ』

「そっちのが重い!!」

拘束を解けるほどの筋力はない。生命の危機。窮地を脱するべく、救援を要請する。

「…漏瑚助けて!」

「貴様の自業だろう」

「……夏油!」

「…」

「…チツ、真人!」

「やーい、魂ブルってるう!」

漏瑚は見捨て、夏油は見ないふりをし、真人が嘲笑う孤立無援。助けを求めるには日が浅すぎた。

だがそれで諦める少女ではない。次の手を打つ。

「ひつぐ…えぐつ…もう痛みも感じない…」

泣き落とし。交渉の手段として、涙は立派な武器になる。子どもの涙はあらゆる我儘を通し、女の涙は攻撃の手を緩める。浅い人生経験ながらも少女はそれを知っていた。

「というか元々痛み感じない体質なんですけど…なんか逆に気持ち良

くなってきたといつか……眠くなってきたといつか」

『良いことですね』

「よくねえよ」

大誤算。元より呪霊に涙など無い。花御にとって涙とは、人間が分泌する体液の一つに過ぎない。

『せめて大地の、糧となれ』

万策尽きた。馬鹿なことしたなあと思いつつ諦める。その時だ。

術師は負の感情をコントロールできるため、呪力漏出が0に近い。だが0ではない。少女も同様に正の呪力漏出が僅かにあり、木はそれを吸って少しずつ成長していた。

天啓が木から落ちてきた。

『これは………実?』

それは花御も知らない現象だった。呪いの種子を打ち込まれた者の末路は、大方決まっている。呪術を使わずに殺されるか、呪術を使おうとしても体が裂けてしまう。だが少女は打たれ強かった。

実を手にとると、僅かだが暖かみを感じる。どうやら温度があるらしい。花御はその、異様な果実について思案していた。

(膨大な呪力が、植物の成長を促した? いやそれよりも気になるのは、正の呪力を孕んでいること。これは、いったい……?)

花御は、植物に関する事なら何よりも優先する。その隙を見逃さなかつた。

「実! その実、あげます!」

許してください! 今日何度目かも分からない謝罪。だが今は言葉だけでなく、呪気持ちのこもった品がある。

『………これは、私が具現化したものです。元から、貴方のもではありませんよ』

「んーなるほどお」

完璧な理論武装。少女も具現化する系の術式を持っている。もし「自分が出したから自分の物」理論を否定すれば、具現化したものを元の持ち主に返しに行くのが筋だろう。

なお花御はそこまで考えていない。追い詰められた少女は無駄に頭を回転させ空回りしただけだ。深読みともいう。

無念にも取り上げられた詫びの品。だが明らかに手ごたえはあった。捧げるというアプローチ自体は間違っていない。そして少女は思いつき出す。手元にはないが、自分の物だと言える存在を。

「……土地あげます！まだ結界残ってるので！何も無いけど木とか、きつと気に入ると思います!!」

木、だけに。僅かに生まれた脳の空気が、下らない洒落を考える。

『……ああ、貴方が禁足地きんそくちの。……それで手を打ちましょう』

交渉成立、許された！

花御が指を鳴らすと、少女を押しさえつけていた木が四散する。起き上がり自由になった体がやけに軽く感じる。

そういえば、腹には穴が空いてたな。反転術式の使い手でも失われた部位を回復できない者は多いが、少女はその限りでない。というか蘇生も出来る。急いで体を再生させる。

花御が目の前に立つ。先程の実を持ちながら。

『……あの禁域は、緑に優しい方が守ってくれているのだと、思っていたのですが……』

「すみません！緑は好きです、目に優しい！」

『聞いてませんよ』

花御は、少女の話を聞く以前からあの空間のことを知っていた。というより木々が教えてくれた。

人間は地球上のあらゆる場所に分け入り、秘境を汚してきた。だが、まさか街中に人跡未踏の地があるとは思わないだろう。故に花御はそこを秘境ではなく『禁足地』と名付け、あの聖域を見守っていた。

花御は、人間のいない自然を愛している。だが実は、真の意味で人間のいない自然に触れたことはない。ないからこそ、欲するのだ。花御にとってあの聖域は、目の前にあって掴めない、美しくも残酷な夢だ。

その夢に手が届く。目の前の少女を殺しても今なら聖域に足を運べるだろう。だが花御は目の前の少女に対し、どこか奇妙な縁を感じていた。

『一言はありません。私は許します。：貴方も、一言はありませんね？』

「あ、はい」

『私は、この領域の主ではない。：彼も、怒っている。早く謝ったほうが身のためですよ』

「……………えっ？」

少女は子どもで、花御は大人だ。実際でかい。

だが少女は思う、大人とは汚いものだと。

呪霊にとつては誉め言葉、かもしれないが。

* * * * *

陀良だごんは海の呪霊だ。彼にとって海とは、赤子を寝かす揺り籠であり、ぽっかりとゆったりと、それに浮くのが何より好きだ。生得じやく領域ぢの波が、なんだか何時もより穏やかな気がする。きつと、仲間達が来てくれたからだろう。陀良は海と同じくらい、皆が大好きだ。そういえば、なんでみんな、ここにきたんだっけ？日の光を浴びりラックスしきった頭の中で、そんな疑問が浮かんできた。

その直後。

「んぶ、ふおっ!!」

空から飛んできた何かが、陀良の頭に直撃する。下手人を確認すると、それは織って作られた敷物のようなものだった。

えっ、なにこれ？だれがやった？そんなことを考えていると、それはどろりと溶けて消えた。どうやら何らかの術式によるものだったようだ。そして。何やら岸が騒がしい。

そちらを見やると、花御が人間に木を生やしている。思い出した。今日は、人間と会う日だったな。しかしその人間は、殺される運命にあるらしい。

おわったら死体ほしいな。はなみやさしいから、きつとわけてくれるよね。一瞥をくれてやった後、頭をさすり目を閉じた。

「…あの……すみませーん」

人間の声がある。陀良は無視して眠りを続ける。

「えーお騒がせして…申し訳ございませんでした」

「……ぶっ!?!」

あれやったのオマエか!?!完全に目が覚めた。そいつを見ると、先程花御に殺されかけていた人間ではないか。何故生きている?陀良には全く理解できない。花御は優しいが、それは仲間に対しての話。人間に容赦はないはずだ。

「その、もし良ければですけど」

人間は、その手を差し伸べる。知っている、これは握手だ。以前夏油と真人がここで会ったときに、やっていたから覚えている。それを真似し陀良も漏瑚や花御らと手を交わしたことがある。何かぼかぼかした。

はなみは、これにやられたのかもしれない。

だが陀良は無視する。人間とは仲良くなれない。

花御が許したから、殺しはしないが。

「腕、どうぞ」

「ぶっ!?!」

少女の凶行には理由がある。断頭台に上る罪人のような気分で呪霊のもとへ向かう少女。先の大戦では、何かをあげれば話が早く終わると学んだ。だが手札は全て使い切り、捧げる物は残っていない。ならばこの身を捧げようと、少女は人身御供に思い至る。でも全身は嫌なので、腕で勘弁。蝮だけに。

え、いいの?陀良は人間を食べることも好きだ。呪霊が人間を食べるのにはいくつか理由があり、その一つは呪力を得るためにある。呪

力を孕んだ人間を喰らうと、己の力になるのだ。死体でもいいが、生きたままのほうが新鮮な呪力が得られるし、量も多い。陀良の場合生きた人間を丸呑みして腹の中で溺れさせる食事法を好んでいるが、四肢を一つずつ取って味わうのもいいだろう。

この人間はいいやつだ。袖を捲くって生身の腕を晒す配慮もポイントが高い。陀良は大きく口を開き有難く腕を頂戴する。血肉を貪り骨を噛む。

呪力
味が、ない。

そしてもう一つ異変に気付く。食べたはずの腕が、生えている。

「…まだあるよ」

陀良の得意分野は、どちらかと言えば大食いだ。一人一人を早く消化するより、一度にいっぱい食べてゆっくり味わう方が、呪力変換の効率がいい。だがこの人間には味が無い。ならば味が出るまで味わおう。

この瞬間、早食い競争の世界に身を置いた。

食べる。生える。食べる。生える。食べる……

「なーんか見覚えあるなあ」

「…わんこそばかい？わんこそばは、岩手県に伝わる蕎麦の一つだよ。一応言っておくと『わんこ』とは犬のことではなく、お椀を意味する。発祥には諸説あってね、その一つは」

「いや違うけど。その話、長くなる？」

夏油がわんこそばっぽさを見出す中、真人はそれを別のものに重ねて見ていた。

(餅つきだこれ)

トリックは単純。正の呪力で腕を治し、呪力を引っ込める。その繰り返し。この作業で肝心なのは、呪力を引っ込めるタイミングだ。引っ込めるのが遅すぎると怪我をする。陀良が。

陀良は、もう食うのを止めた。腹は満たされたが心が満たされていない。陀良は結局、呪力の味を知覚する事は出来なかった。目の前の少女は、何かおかしい。美味しくない。

一方少女は安堵していた。想像よりも食いつきが良かったが、此方の呪力が切れる前に飽きてくれたようだ。あとなんか、かわいかった。

若さ故の過ちから始まったチキンレースは、存外面白かった。

「…また遊ぼ」

少女はそそくさと退散する。陀良は負の呪力を出さない少女が、嫌いではないが気味が悪い。

* * * * *

「イカれてるわ、ここ」

「おっ気付いた？でも、幸月も相当だからね」

「帰っていい？」

「だめ。」

…一週間後、私達は高専を襲撃する。今日はその作戦会議も兼ねている。まあでも、君の役割は、先の実験でもう決まったかな」

「…マジ？役割あるの？」

「大マジ。後で確認はするけど、多分問題ない。ある意味、誰よりも重要な役割になるよ」

第四話 鎮魂家たち

呪術高等専門学校。

東京と京都に1校ずつしかない呪術師達の教育機関である。呪術の才能を持つ若者は非常に稀で、その数少ない生徒を死地に送ることも暫しある、呪いの学び舎。若者たちは今、姉妹校交流会でまともでない青春を謳歌していた。

その青春を、今から壊す。

東京校高専敷地内にある建物の屋上、わたしは飴玉を転がし暇をつぶしていた。上からは青い森が何処までも見渡せるが、全く人の手が入っていないわけでもないようで、同じ様な古い建物群が頭を出している。夏も終わりとはいえまだ暑さは厳しい。だが蝉の鳴き声は確かに少なく、微かにだが秋の訪れを予感させる。痛みを知らない女子だが、暑さ寒さは知っている。故に夏が嫌いだ。だが夏の盛りより、夏の終わりのほうが嫌だった。

「9月ってこんな暑い…?」

蝉時雨という言葉がある。多くの蝉が一齐に鳴いている様子を、雨の降る音に例えた夏の季語だ。蝉の声は寂しさや切なさを感じさせ、どこぞの岩にはしみ入るらしい。わたしにとって蝉は、暑さを和らげ涼しさを感じさせる虫だ。でも今はそれがない。中学のシャツに滲む汗が、妙に苛立たせる。

「…降りよつと」

今になって、休むのにいい場所があることを思い出した。

森は天然のエアコンになる。勿論木陰に入れば陽射しを和らげるのだが、それ以外にも涼しさを感じる理由がある。一つは蒸散。木は葉から水蒸気を外へと発散し、その気化熱が周辺の空気の熱を奪う。もう一つは対流だ。葉のある上部と葉のない下部との温度差が空気の流れ、つまりは風を生む。一説によれば日向より木陰の方が5度ぐ

らい涼しい、らしい。

飴玉を噛み砕いた。

自然の恩恵にあやかるべく、五重塔から眼下の森に向かって身を投げる。わたしに高さ約30メートルから飛び降りても丈夫な体はなく、五点着地の心得もない。それは地面に叩きつけられ、何度か跳ねた後に運動を停止する。だがそれは血肉を飛ばしても意識を飛ばすことはなく、数瞬もすればむくりと起き上がった。

「女つて空から落ちてくるもんなんだな」

「親方なら5秒で受け止めろよ。日曜大工」

「あゝ あん？」

筋骨隆々の身体に黒いエプロン、そして片手に斧を持った男がわたしに声をかける。男の名は組屋鞆造。人を新しい「形」に「生まれ変わらせる」趣味を持つ呪詛師だ。今日は高身長しゆそしの男、五条悟をハンガーラックにすべく交流会にお邪魔する。わたしはこの男のことが、嫌い寄りの大嫌いだ。

最初に会ったのはあのビーチだが、まず第一印象が良くない。初対面のこの男は、まず挨拶代わりにわたしを襲い、その斧を首に突き立てた。反転術式でどうとでもなる傷だったが、流石に異物を体に残したまま再生することはできない。術式を使うおうにも声が出ず、もし真人が手を出さなければどうなっていたかと思う。まあこの男引き合わせたのが他ならぬその真人だが。殺害のちの死体漁り。それがこの男への唯一忘れない記憶だろう。

組屋も組屋で少女のことを「つまんねーガキ」と認識している。剥ぎ取り回数無限のガキがいるというので嬉々として討伐クエストに向かい、実際山ほど素材を得た。そこまでは良かったが、その後が問題だった。

早速工房アトリエに持ち帰り骨を組み立て、弓を作成してみた。左右に位置する頬の骨、つまり一人の人間からたった2つしか手に入らない貴重な素材を贅沢に使った作品だ。さらに言えば、頬骨きょうこつは頬骨体部と頬骨「弓」2つの骨で構成される。我ながら洒落が効いている。間違

いなく渾身の逸品。しかし“魂”は宿らなかつた。

組屋は神など信じていないが、全く信仰心が無い訳でもない。「モノには魂がある」と信じている。組屋は真人のように魂は見えない、これは自身の経験によるものだ。例えば重面春太しげもはるた：同じ呪詛師にくれてやった“お手製”の刀。あれの柄を握ると、握り返してくる。故に組屋はモノには意思ないし遺志が宿ると考えている。一流の職人とは、モノに宿る何らかのパワーを引き出せるものなのだ。組屋は呪具作りに関して天性の才能を持つと自負している。つまり何度やつても道具に魂が宿らないのは腕が悪いのではなく、素材の方に問題がある。

ここまで考えて組屋は、「俺の目も曇つたのかもしれない」と思い直した。一流の職人は、素材にこだわる。だどいうのに、自分はどうか？その心を忘れて素材集めに没頭し、意味のない品を作り続けてしまった。今もなお組屋の工房アトリエには、命宿らぬ死蔵品達が眠っている。そこまでやって気付いた。「やっぱ量より質じゃね？」と。

今日は原点に立ち返るため、ここに来た。粗雑チビガキな下位素材などではなくG最強の男級素材を求めて。余談だがモンハン○イズに登場するケ○ビは討伐出来ない。他意はない。

証明しろ。

俺は

呪詛師かりうどで加工屋かこうどだ。

「楽しみだなあ…ハンガーラック……」

「あたまおかしい」

何よりも嫌いなところは“こういうところ”だ。死体を使つてもを作るといふ、この異常性。誰でもドン引きものではあるが、わたしはこのような冒瀆的行為に対して、人一倍に敏感らしい。

あんな事。許されていい、はずがない。

「さて。俺らも仕事を始めよう。組屋は帳、俺は呪物の回収だね」

「いいハンガーラックが作れる…」

「家具なぞ作る暇があるなら、カツラ作れよハゲ大工」

「ハゲてねえよ！スキンヘッドだ、チビガキ！」

斧と頭がテカテカ光る。少女はハゲが嫌いだ。不潔と相場が決まっている…というのは少女の偏見だが、この男に関して言えば不潔なこと間違いはない。

男と少女と呪霊は各々の目的を果たすべく、動き始める。

* * * * *

「もう、アイツの顔見なくていいんでしょ？清々するね」

今日の襲撃は、襲撃そのものが目的ではなく、忌庫にある呪物の回収が本命になる。その本命に目を向けさせないため、組屋は帳と戦闘による陽動を担当している。

とは言え組屋自身はそのことを知らず、つまりは捨て石にされている。“呪”を冠する者のほぼ全てに当てはまるが、呪詛師の命は特に軽い。呪霊は当然、犯罪に手を染めるので呪術師から追われるし、今回のようなヤバい依頼を引き受ける事もある。

鼻歌まじりでクエストに向かった組屋だが、身を以てそれを理解するだろう。モンハンなら二乙までは出来ても現実に乙などという甘えはない。ましてや相手は五条悟、遭遇次第即撤退するのが定石だ。

「…組屋とは、気が合うと思ったんだけど」

「はっ…どっが？」

(マジで気づいてないのー？ 嗤えるね)

少女のそれは、同族嫌悪の類であると真人は断定する。組屋は死者の肉体を弄ぶが、少女は魂を冒瀆するのだ。肉体か魂かの違いはあるが、どちらも死者に対しての情動など持ち合わせていない。魂に関わる術式を持つという意味では己と少女の関係も面白いかもしれないが、それ以上に真人の目には組屋と少女が重なって見えた。

肉体か魂か、その恥辱に優劣をあえて付けるなら、少女の方が数段いかれていると真人は思う。組屋は、素材の声を聞いても死人の声など聞かない。生きたまま加工することは、アマのやる事だ。下手に獲物が暴れると状態が悪くなり無残な作品になってしまう。“プロに遊び心はあっても、遊びはない”。組屋のモットーである。

だが少女は死人の声を聞いている。聞いてはいるが、聴こえてはいない。少女の甦らせる者達は、個体によっては口答えも抵抗も一応できる。真人は前に、その死者達の「助けて」を聞いた。当然少女も聞いたはずだが、少女の魂に揺らぎはない、無反応だ。死人に口を与えておきながら、一切耳に入れることはない。その一点において、少女は組屋よりも遥かに異常だ。

(これは、伸びるな)

常軌を逸した精神構造に対して真人の反応は、恐怖するでも憤慨するでもなく、ひたすらに感心していた。真人は呪霊で、生まれながらの悪。それは自覚してるし、何かを思う事も、ない。だが少女は違う。自分のように悪を開き直すことはないし、言葉を並べて正当化することもない。ただ当たり前のように“死”を弄ぶのだ。生者を踏みこじめる己と死者を踏みこじる少女。自覚する呪霊と自覚しない神。果たしてどちらが“人間”だろうか。

「そう考えると、無為むいてんべん転変てんべんってお得だね。一度で二度美味しいもん」「何の話?」

少女の異常に気付いたところで、それを指摘するほど真人は“できた人間”ではない。ただ「俺と同じくらい将来有望だな」と思うだけだ。

「無為転変ズルいわ、ほぼ攻撃無意味とか…」

「魂に干渉されるとダメージ貰うよ」

「自然系ロギアにも武装色は効くからな」

「俺は特殊な超人系パラミシアじゃない?」

真人と同行し、忌庫へと向かう。途中で二級呪術師三名と準一級呪術師一名に遭遇したが、真人の前ではないも同然の壁だ。準一級の方は発動に時間がかかるタイプの術式だったようで、その時間稼ぎを二級の方が担当していた。だが今日の真人はやる気満々であり、いつもなら遊びそうなものだが先に準一級を片付け、戦線が崩壊した。どの道時間を稼げた所で、魂に干渉出来ないなら無意味だったが。

「任務完了っ」と

「後は帰るだけだね」

組屋の最終クエストに対して、こちらは採集クエスト。採集クエストも舐めてかかるとマップを覚えてなかったり採取ポイントが分からなかったりで時間がかかることはあるが、どうやら既に何らかを仕込んでいたらしく楽に見つかった。あちらのソロ討伐は、対五条悟用の帳がもう上がっているので失敗に終わるだろう。

「遺骸創術いがいそうじゆつ 『開ひらき』」

とはいえこちらもアイテムを集めただけだ。作品にもよるが、これからベースキャンプに戻って納品する必要がある。

まあ。これこそ、秒で終わる。

「よーやっと、わたしの出番か」

第五話 供花観論

——時を同じくして。

“宿讎の器” 虎杖悠仁と1級呪術師・東堂葵とうどうあおいの二名を相手にしていた花御は、想定以上のダメージを受けて『供花くげ』を解禁した。供花は「左腕」で植物の命を奪って呪力に変換し、その呪力を左肩の花から放出させる技。これは花御にとって奥の手、というより禁じ手に等しい。

植物は呪力を孕まない。呪力とは負の感情から生まれるエネルギー。その呪力が生まれえないということは、植物は感情を持たないことを意味する。“光を受けたからエネルギーを作る” 葉が傷ついたから毒を出す”といった外的刺激に対する反応こそあれど、それを感情と呼ぶには機械的。だが植物から呪力が生まれた。それはなぜか？

花御は知っている。

命を圧縮し、植物が持ち得ない感情を呼び起こす。

苦痛、恐怖、無念、怨嗟、それら全てを。

(…無駄にはしない)

胸に湧き上がる感情。これも知ってはいるが、今は無視する。

『——領域展りょういきてん…ツ!!』

帳が、上がった。五条悟が来るのも時間の問題。

気分は晴れないが、撤退しなければならない。

『…退きます』

そう言い放った直後。木の呪霊の足下に、黒い沼が現れた。呪霊がその沼に入り、五条悟の“☒”は森を切る。

「つ!?待て…」

「行くな超親友ブラザー！敵、それも新手のテリトリーだ！孤立しかねん!!」

東堂が制止すると同時に、黒沼は音もなく消える。残されたのは土だけだった。

* * * * *

「便利だねモドリ玉」

「その呼び方止めろや」

遺骸創術の『開』は黒沼から死した生物・無生物を復元する術式。だが、中に現実の物体を収容する事も出来る。

『出る死者が生物・無生物を問わないのなら、入る生者も生物・無生物を問わないのではないか？』…単純だけど、発想は大事だよねえ」

夏油の見立ては大当たり。だがこれを所謂“ワープゲート”と呼ぶには少々語弊がある。

少女は基本的に『開』く場所を目視で確認しているので、遠い場所だとマーキングなしでは発動できないし、『内側』から開けるにも外が見えないので狙って出せない。予め移動地点に『開』を発動し、別の地点でまた『開』を発動する必要がある。

つまり戻る時には使えるが行く時には使えない。

「黒霧」に…なりたかった……」

「なんか言ってる」

不満はもう一つある。真人は「モドリ玉」に例えたが、これも正しくない。これは『開』から『開』に飛ぶのではなく、中に広がる異空間から目的の『開』に向かう必要があるのだ。

この空間を一言で説明すると、洞窟。光は届いていないはずだが、薄暗い程度の明るさを保ち、足元に黒い水が溜まっている。帰るためにこの洞窟を歩いているはずだが、闇に吸い込まれて帰れなくなる気がしてくる。

(キショク悪い)

その空間を移動する。徒歩で。その上景色も楽しめないのだ、少女の機嫌が悪いのも当然だ。だがここにもう一人、落ち込んでいる者がいた。

「どうした、花御?」

『……真人』

真人は魂の機微に目聡い。その機微を尋ねると、花御は逆に絞り出すような声で真人に問うた。

『植物達に、“魂”はありますか?』

「ない。…と俺は見えるから断言するけど、花御は違うの?」

花御は吐露する。

『貴方は以前「感情は魂の代謝物」と、仰っていました。私の「供花」は植物達を殺して呪力へと変換する…その過程で、感じる。植物達の感情を』

『それを感じる以上は、魂もあるのではないかと、思うのです』

そして、もう一つの思いも。

『そして、私は。私が嫌いな人間共と、同じ事をしている。それが何よりも……許せない』

花御は人間が嫌いだ。人間は、森や大地を海や空を、犯してきた。この星を守るべく、人間共を根絶やしにする。

だが自分も、植物達の命を弄んだではないか。

その事実が嫌だった。

「なるほどね」

「でも俺は、やっぱり無い派かな。花御が感じて俺は感じてないし、どちらかが一貫している必要はないんじゃない?」

「生き方も同じだ。花御は植物を守るけど、別に殺したっていいと思う。まあ言ったところで、花御は気にするんだろうけど」

「俺の世界の植物に魂は無いけど、花御にはある。こんなもんかな」

真人にとって“一貫性”とは枷でしかない。その枷に囚われた人間達とは違って、呪霊ならもつと自由に生きるべきだ。この世界も一つである必要はない。

そしてもう一人、“魂”に詳しい者がいる。

「幸月はどう思う?」

「ネザーゲートは嫌だ」

「そつちじゃなくて。＼植物の魂＼について」

「えっあ、えっ……いや聞いてた、聞いてたよハイ」

突然話が飛んできた。少女は面食らった後暫し考えてから、結論を出す。

「…花御が植物に魂を吹き込んだ。これでいい」

『私が?』「……その心は?」

「花御が植物を『殺す』という強い感情を植物に向けたから、植物が『殺される』と感じて呪力……というか魂が生まれたんだ」

「術師がやるような、物に呪力を籠めるとかそういう話ではない。『感情から魂が生まれる』と思う。まず万物には自我があつて、そこに感情を向けられたモノ自身が『何かやりたい』と思うから魂が生まれて、その魂が感情を発露する。あえて言うなら、呪霊お前らの生まれ方に似てるな」

「花御の殺意に応えるべく、植物に魂が生まれた。これなら矛盾もない」

へえ、と真人は感心した。

道筋立てて理論を述べる少女の普段使つてない頭にはなく少女の言葉に。「感情から魂が生まれる」言い換えれば「魂は感情の代謝物」であり、これは真人とは真逆の考えだ。

(そういうことも、あるかもな)

一方でそれは、花御にとって、

『…つまり私は。植物達を、苦しめたと?』

——あまりにも残酷で。魂を知らない植物達に、魂を吹き込んで苦しめた。

「…一概に悪いとは言えないよ」

「花御は植物達を『殺した』と言つたけど、人間にその言葉は出ない。人間が使うのは『伐採』とか『収穫』だ。でも、花御は違う。自身と植物の位置を近い所に置いている。」

「花御以外じゃ、供花は成立しない。要するにだ、優しいってこと」
『……そう、ですか』

花御は自分の「左腕」が嫌いだ。植物を殺してしまうから。でもそれは自身が花御である証らしい。

そう思うと少し、左腕の痛みも、和らぐ気がした。

「花御。植物に名前を付けたことは、あるか？」

『いいえ。それが自然のあるべき姿ですから』

「わたしもない。花の名前とかは知ってるけど」

どうやら少女の話は続くようだ。真人とは違い花御は魂に対する興味は薄いのが、今はそうでもない。

静かに聞くことにする。同じく真人も聞く気だ。

「これは持論になるが手っ取り早く魂を宿らせるには『名前』を付けるのが一番だと思う。魂が宿る前、自我だけのソレに名前を付けると……嬉しい」

「命があれど名前が無ければ、ソレに魂はない」

「つまり、つまりね」

『呪胎九相図』とかいうヤツいる？』

『います』「いるけど」

少女は『呪胎九相図』の受肉に反対である。少女は呪霊に強くても、受肉体には強くない。只でさえ変な種をだす花御とか普通にフィジカルも強い夏油がいるのだ。これ以上自分の優位性を損なう変化に對し、敏感になるのも無理はない。

「ていうか普通に名前あるし。『脹相』とか」

「それ、シワシワネームだろ！そんなん貰っても嬉しくねーから！魂ねーから！」

「必死じゃん、ウケる」

* * * * *

(俺、ハブられてるなあ)

女の子1人と呪霊2つ、そして己…重面春太を入れた4名が、この

場にいる。

「可愛い女の子いるし、俺の話聞いてもらおう」と思っていたのだが、どうやら呪霊は“魂”とかいう話に夢中らしく、女の子も取られてしまった。

(つまらない)

重面は“アリとキリギリス”で言えばキリギリス側の人間だ。自分が楽しければそれで善いが、都合の悪いことはやらない。でも、今の重面はアリだ。

この洞窟には“ルール”がある。普段なら気にも留めないことだが、強要されると何かムカつく。自分は特別な存在で、ルールを守る必要はない。破って何か起きたところで、俺の能力があれば何とかなる。

そう考えると、細長い洞窟がアリの巣穴のようにも見えてきた。

(俺がルール破ると、俺が悪いみたいになるし…)

だから重面は叫んだ。

五条悟が来たぞ!!!

この洞窟には“ルール”がある。

『決して振り向いてはいけないよ』

『遺骸創術』が死者の魂を呼ぶ以上、その先にあるのは死者の世界。雲の上とか草葉の陰とか色々あるけど、君の場合は地下にある。死後行き着く地下の世界といえば“黄泉の国”』

『見るなの禁』を知ってるかい? 「見てはいけない」というルールを破ったものに、良くないことが起こるといふ物語の類型だ。“イザナミ”とかね』

『君の世界にイザナミが居るかは分からないけど、振り向かせた奴は戻ってこなかった』

『だから、決して振り向いてはいけない』

「…人間のくせに勝手すんなよ、殺すぞ」

真人は人間の悪意から生まれた呪いだ。重面の嘘には引つ掛からない。

それに今やりたいのは魂トーク。人間に構う時間も惜しい。

(黒い霧…はっ！霧吹きにでも入れてみるか？いやなんか詰まりそう…)

少女は重面…というか他人の言葉が全く耳に入っていない。

それに今やりたいのは思考実験。思考の沼に潜っていたい。

『なッ——来ていないっ!!』

花御は真面目で、賢い。

五条悟の脅威を、先程見てしまった。

“ 五条悟ならあり得る ”

その可能性が方に一つでもあれば、体が身構える。

「…間違いは誰にでもあるじゃんかー?」

清廉潔白を主張する重面だが、その顔は歪んだ笑みを浮かべたままだ。

重面が嘘について、花御はそれに騙されただけ。

花御に非はない、悪いのは重面だ。

でもそれは、禁を破る理由にはならない。

禁は破られてはならないのだから。

そこには死者がいて、彼らは見られなくなかった。

死者が生者に手を伸ばす。

第六話 黄泉がえり

花御が身構えた直後。

「…………ツ!!」

数瞬前まで存在していなかった気配、質量のようなものを感じ、他の3人も後ろを振り向いた。

人骨だ、それも一つとか一人ではない。通路を塞ぐように、ぎちぎちに詰まっている。

それらは前進していることに誰かが気付く。

誰が言うでもなく、一斉に足を動かした。

——禁は破られた。

走った。わたしの頭はからっぽだ。何一つ考えていない。いや一つ考えていることがあった。

「じげも」 お！絶対、許さんぞ!!」

叫んだ。目には涙が浮かび、口は罵詈雑言で溢れている。

「うさぎとかめ」は、兎と亀が山の頂上を目指して競争し、油断した兎が着実に歩いていった亀に負けるというお話だ。この物語で得られる教訓としては「ゆだんたいてき油断大敵」や「てんてきせんせき点滴穿石」などがあるだろう。

わたしは亀だ。呪力による身体強化が出来ないので早く走るのに向いていないが、反転術式で体を回復できるので長距離走には向いている。

だが今求められるのは兎で、わたしだけ亀だった。

「ギリシヤ人！おんぶ!!」

「ガキか！走れよ!!」

助けを求めるが、重面にそんな心はない。

自分が良ければそれで善い、都合が悪いことは全て忘れる。重面はそういう男だ。

「…アレに捕まると、どうなる?」

真人は改造人間を取り出して骨の塊に放り投げた。骸骨は不可逆

的な死、その末路。どうなるのかなど想像に難くないが、念のため確かめる。

改造人間は勢いよく形を変え、棘の物体になった。

「…ちっ」

骨に当たるが、砕けない。寧ろ改造人間に齧りつき、肉を貪り血を啜り始める。

「幸月がんばれー」

「血も涙もねえ!!」

最前列の真人と最後尾のわたし。ふり返る余裕などないが、咀嚼音は耳に届く。改造人間が食われるなら、花御はと声をかける。だが何も起こらない。

「花御?」

『やっています、出来ません!!』

『術式が発動しない…というより、命芽生える環境がない!!』

植物は強い。砂漠の植物は地下に10数メートルの根を伸ばして水を求め、都会の植物はアスファルトを押し上げてでも光を求める。

その植物すらも生えない此処は、まさに“死の国”。

「もうゴールしてもいいよね…」

「ふざけんな！俺どうなるんだよ!!」

この世界には、わたしの術式でやって来た。術式が消えたら出口は閉じるだろう。最悪この世界すら消えるかもしれない。

「俺が先頭、幸月は重面に持たせて真ん中、花御が最後。これで逃げ切る」

「なんで俺が持つんだよ!」

「俺呪霊らが持つのは危ないだろ、分かれ人間」

生き残るべきなのは真人、次点でわたしだ。呪物を持つのは真人だし、そもそも呪霊達のボスなので捕まってはいけない。

真人を逃がすためにわたしが要るので、癩だが重面に持たせる。改造人間に持たせてもいいが、あれの寿命は短い。

花御は最悪の場合、囿になって本命を逃がす。重面は最後尾でないことに感謝すべきだろう。

「なんで俺が…」

重面は仕方なくと言った様子でわたしを担ぎ、4人は出口を目指す。

「幸月、出口まであとどれくらい?」

「大体2.5キロ、このままいけば10分で着く」

先程までわたしに合わせていたので小学生の徒競走だったが、今は遅刻寸前の女子高生が乗る自転車並の速度で走っている。

「あー酷い目にあつた…。見ただけで襲うとか沸点低すぎ、ピツグ〇ンを見習え」

「どーみても、ス〇ルトンだろ!クソガキが!!」

「ツツコむ余裕あるんだ…」

重面とは違い、余裕が出てきた。担がれたついでに話し相手をしてもらおう。重面も話をしたがっていたはずだ。

次の瞬間。壁から生えた腕がわたしの頭を掴む。

「は、あ、ああ?」

「くそっ離せ!!」

重面が刀で叩き切るが、手は増える一方。わたしの頭はもう半分、骸に覆われている。

『?!なぜ私ではない?!』

花御は疑問を抱いた。

先の調査では、振り向かせた者は全員帰ってこなかった。トリガー 禁を

破つたのは全員。今最後尾にいるのは花御で、少女は真ん中にある。

(距離ではない。順番がある?)

少女だけが襲われている。重面が反撃しても「邪魔だなあ」と言う風に振り払うだけ。

「幸月、呪力抑えて」

「…!あ、そういう感じ!?!」

「かもしれない」

呪術とは術師や呪霊の数だけあり、千差万別。それでも多少の法則はあり、呪術の問題なら大抵呪術で解決できる。

まずは「呪力の量で決めている説」から。

「っ！マシンになった！」

引つ張る力が緩む。花御が隙を突いて手を碎き、わたしは拘束から解放された。

だが標的は変わらない。わたしを捕えるべく、また壁から手を伸ばし始めた。

「単純な呪力量じゃない、他にもあるな」

『……真人。これは、呪力の“質”では？』

「呪力の質……成程。あり得る」

『確かめましょう』

花御はもんぺのようなズボンから“実”を取り出し、地面に転がした。

骸はその実に手を伸ばす。

「ビンゴだね。正の呪力が、彼等の好みらしい」

花御がわたしに植えた呪力の種。それから生まれた呪力の実には、わたしの呪力が込められているらしい。その実に骸が齧りつき、足を止めた。

「それはいいとして……」

『実は先程ので出しきりました』

「んー嫌な予感」

呪胎九相図^{じゆたいくそうず}。最悪の呪術師として名を馳せた加茂憲倫^{かものりとし}によって作り出された、特級に分類されるほどの呪物。呪霊の子を孕む特異体質の娘により、九度の妊娠と九度の墮胎を繰り返して生まれ堕ちた胎児が、死後呪物と化した。

「イエーイ！九相図^{くそうず}のみんな見てるうー？」

「今花御が女の子に種付けしてまーす！」

『真人』「流石に人間性を疑う」

花御がわたしに種を植え、わたしの呪力が実を育てる。完璧な作戦である。だが重面は呪木を抱えて走るのはキツイらしく、呼吸を乱す。真人は何もしない。

骸骨達は実の方に夢中で、何なら取り合いすら起きている。死の世界においても食糧不足は深刻な問題らしい。そのお蔭でわたし達は、かなり距離を離すことが出来た。

「あと500メートル…」

「このまま逃げ切るよ」

意識が飛ぶのが先か、出口にたどり着くのが先か。何とか脱出する方が早く終わりそうだ。

そう思った矢先、誰のものでもない声があった。明らかに変化、全員が振り返る。

サツ…サツ…

カエ…テ

タ…ケ…

其処にいたのは、肉を付けた骸達。だが揃って中途半端で、いつそ骸骨の方が不快感は少なく思える。

「…やっぱりピ〇グマン」

「言ってる場合じゃないだろ！」

それらは今までとは比べ物にならない速さで此方に迫り来る。時間はない、花御は覚悟を決めた。

真人は、全く別のことを考えていた。「肉を付けたのは単に実を得たからだけではない」と。

起死回生きしかいせい。それは窮地からの逆転を表す四字熟語。「起死」と「回生」は共に、死にかけた人を生き返らせることを意味する。

この状況で追い詰められているのは逃げる生者と追う亡者、その両方。だが亡者たちは肉を得て状況を立て直し、距離を縮めてる。ならば此方も、死地に活路を開かなければならない。

(より洗練された逃げるための形)

(逃げるためのインスピレーションを表現しろ!!)

この土壇場において、真人は成長を遂げる。

「無為転変むいてんぺん // 多重魂たじゅうこん」

無為転変は魂に触れその形を操作する術式。今ここに真人は複数

の魂を混ぜる術を身に付ける。一人でやれることには限界があり、魂も同じ。それは改造人間を使った技の出力を大きく上昇させた。

「マヒトカート」

「今なんて言った!？」

融合させた魂達は、車の形に生まれ変わった。真人はそれに花御とわたしを乗せる。

「!俺も」

「悪いね重面、この車三人用なんだ」

車はエンジン(?)を鳴らし、洞窟を走り抜けた。

「しぶといなコイツ…」

発車の直前。重面は車体に引つ掻けるように刀を刺した。車はそのまま発車し、途中重面は気を失ったが、刀が重面を握り返し事なきを得ていた。

「やっつく?」

「いや、そのうち死ぬでしょ」

気絶した重面と燃料切れの改造車を置いて、三人で夏油の待つアジトへ向かう。

「あ、もう一つ思いついた」

真人が二つに別れ、それぞれ瓜二つの姿になる。

「俺達、マヒトブラザーズ」

「…弟さんは?」

「まんまミーや」

コイツ絶対早死にするな、と思った。

* * * * *

交流会襲撃の後。

まだ一段落ついたとまで言えないが、呪術高専の教師達は一ヶ所に集まり、現段階での情報を共有していた。

『ハンガーラックを作ったかったんだ。それをあの坊主名前は知ら

ねえ』

『男か女かも分かんねえ、白髪オカツパのガキだ』

捕えた呪詛師の自白。まともじゃない要領を得ない発言も多いが、それでも貴重な情報。精査はする。

『黒髪のクソガキ：サツキって言ってたな、こっちは女だ術式は知らねえ』

『ああでも、反転術式？は使えるぜ。腕とか骨まで生えるんだよ。見てて面白かったなーアレは』

「：性別不詳のオカツパ坊主のガキんちよ、それから反転術式の“サツキ”、心当たりは？」

1級術師・冥冥めいめいが訊ねる。

「無い。無いけど伊地知いじち、黒髪の方についてもっと何か言ってた？」

「……えー、重要性は極めて低い情報ですが……」

「いいよ、言って言って」

「……『あのガキ、俺をハゲ呼びしやがって』と……」

「OK、黒髪の方は確定だね。ハゲの頭からハゲって言葉は出ない。でしよーおじいちゃん？」

「……」

補助監督・伊地知いじち潔高きよたかの情報から名推理を決める男・五条悟。これはおじいちゃん……楽巖寺嘉伸がくがんじよしのぶも閉口せざるを得ない。

「極めて高度な反転術式を使うとなると……相手は、特級相当の呪詛師か」

「家入タイプかもだし、そこまで身構える必要もないでしょ。特級クラスなら襲撃に来ててもおかしくなかった」

警戒するのは東京校学長・夜蛾正道やがまさみち。

だが「反転術式が使える」という事しか分かっていない。警戒するにも情報が無さすぎる。

「え？いる感じで話進めるの？」とおじいちゃんは夜蛾を見るも、視線は合わない。

それから今後の立ち回りを幾つか決めるが、目下の課題・交流会中

止の成否は生徒たちに委ねられた。

* * * * *

「…逃げたな。ま、食われても困るか」

静まり返った洞窟に、声が響いた。

「クヒツ、少し待とう。須臾しゅゆに等しいことだ」

何が可笑しいのか、それは笑う。

「必ず殺す、■■■■」

第七話 呪胎九相図

「…」

意識がゆっくり起きる。

眠りすぎたらしく、首には眠気が張り付いている。このまま眼を閉じれば、気持ち良く沈めるだろう。いつもなら二度寝三度寝コースだが、わたしは今日やる事がある。

「ん…うう」

意識が覚醒を始める。

目覚めの声で脳を起こそうと試みるが、効果なし。ならばと両手で左右の耳たぶを持ち、下にゆっくりと引っ張って戻す。これで目が覚めると夏油は言っていたが、特に変化は起きない。夏油の福耳は多分そういう事だと思う。

「…ああ」

覚悟を、決める。

寝返りをうち、勢いそのままカーテンを掴む。それは擦れる音を立てて開き、陽光をわたしに届けた。頭は眠りから脱却する。

今は10時。

昨日…というか今日は2時に床に就いたので、8時間程度寝ていたらしい。だが眠りの質が悪く、今日もベットに入る直前までPS4を起動していた。

ここまで自堕落な生活だと親は黙っていないだろうが、親はいない。一人暮らした。

夏油が山奥の家を手配してくれたので、労せず住処を手に入れることが出来た。

「…今日かあ…」

まそんな美味しい話が何時までも続くわけもない。今日は呪胎九相図が受肉し、わたしの生活空間を侵略する。マイホームからシェアハウスになる前に、やるべきことをやるのだ。

コントローラーを手取る。わたしにとつて寝起きゲームは頭を動かす運動であり、目覚めの合図にもなる。今から食事するのもいい

が、朝か昼か微妙な時間帯でご飯を食べるのも面倒くさい。
そう思いながらPS4を見ると、

「おっは、幸月どうしたの」

チャイムは鳴らなかった。

わたしの背丈以上はある窓が開き、流れてくる秋風は耳を滑る。土
足で上がるのもそうだがコイツには常識と礼儀がない。

「…玄関って知ってる?」

「人間って好きだよ。そういう枷に縛られるの」

真人に改める気は全くない。

人間は広がる空も大地も知らず狭い空間で過ごしている。目の前
の少女も例外ではなく、狭い木造平屋に住んでいる。それを更に細か
く切り分けて名前と役割を覚えるなど、無駄な作業でしかない。

「何しに来たの?」

「暇つぶし」

「…ゲームやるか」

電源を入れると機械は身震いのような起動音を鳴らし、少しして青
いメニュー画面を映した。

* * * * *

ある街の夜。

真人に案内された4階建てのマンション、4号室に夏油がいた。
キッチンルームの机には3つ筒状の容器が並び、中で何かが浮かんで
いる。

「呪胎九相図、か」

「ああ。見るのは初めてだったね」

「3つしか無いな」

「他6つは無害な死骸なんだよ」

じっくり見ても何の生物か分からないが、小ささと蹲った姿勢が胎
児であると主張している。

「マジで受肉させるんだな」

「そのために来たんだろ？」

グダグタ言って無駄らしい。とりあえず誰から受肉させるのか話し合い、危険度の低い3番目の九相図から始めることにした。

「早速始めよう」

そう言うとき真人は筒からそれを取り出した。それをつねると、柔らかい弾力で押し返す。

色味も相まって、何だかゼリーのように見えてきた。間違っても口に入れようとは思わないが、口に入れる人間は直ぐに現れる。

「受肉、見るかい？」

ちよつとだけ、興味はある。
がちや。

「はあ!? 子ど」

ばたん。

「え何で裸」

「服あると邪魔だろう?」

「磔の意味」

「死んだふりされると怖いし」

「…終わったら教えろ」

先に受肉しといて良かった。

キッチンルームにて受肉を待つ。悍ましい叫び声と何かが変形する音が聞こえ、少し経つと収まった。

「もういいかい?」

「もういいよ」

再びドアを開ける。

月明かりが部屋を照らし、何かが見えた。

丸い胸から直接手足が生えたような体形。青緑色の体色。顔らしき部分に眼球はなく、流血している。その顔の下、胸の部分にはさらに大きい口がある。

「…か」

「?どうかした?」

「かわいい!!」

「あ、なんだあおまえ」

何だ…この生き物は。何考えているのか分からない上の顔と、逆に分かりやすい下の口。手足の仕草、がらがらの声。

これは、アレだ。アレに似ている。

「カエルっぽくね?」

「褒めてるのそれ」

(いやわかんねー)

グロいが許容範囲内。いやそれが良い気さえする。どんな珍生物かと思つたが、これなら大歓迎。

「1番2番もやろう!!」

「何かノってる」

3番の九相図は呪物としての格が低いので、元の人間の面影が残つたようだ。それでこの可愛さなら、1番2番はどうなってしまうのか。期待に胸を膨らませながら残りの九相図を渡した。

「クーリングオフ出来る?」

「無理」

思っていた20倍は人間だった。

2番は背中を壁に付けながら「私の背中を見たら殺しますよ」と言ってきた。受肉と同時に壁に移動し始めたというので、凄執念だ。背中では絶対に見ないが、背中を隠すよりもまず下を隠してほしかった。なんか臭うし。

1番はとにかく暗い。先の失敗から学んで入室と同時に錦を渡したが、礼の一つもなかった。2番と3番に意識が向きすぎて気付かなかったと言う。九相図の他に興味が無さすぎる。

「九相図は?」

「話し合う時間が欲しいってさ」

人間と呪霊、どちら側につくか。

人間と呪霊の混血。どちらでもない存在。その孤独を解する知能が、彼らにはある。断つても真人らと戦うことは避けられないので、結果は見えている。

「呪霊側につく」

呪胎九相図の1番：確か、ちようそう 脹相。顔色の悪い男が、真人に宣言する。

「嬉しいね、俺も仲良くなりたからさ」

「勘違いするな。呪霊が支配する世界の方が、俺たちにとって都合がいいだけだ」

「おや。これがツンデレってやつか」

予想通り、呪胎九相図は呪霊に協力するようだ。

受肉の恩ではなく彼等の利に因るものだが、下手な理由より信頼できる。漏瑚も恐らく認めるだろう。

「早速だけど、お遣い行ってきてくんない？」

「お遣いだと？」

脹相は真人をじろりと見た。

「宿儺の指：君達と同じ特級呪物。それを回収して欲しい」

夏油が説明を加える。鯉ノ口峽谷・八十八橋。こいのくちきょうこく やそはちばし 自殺の名所とも心霊スポットとも言われる大橋であり、呪霊が生まれるのも当然の場所。

そこに居る呪霊が、宿儺の指を取り込んだ。それを祓って指を持ち帰る、これが任務だ。

「高専の連中も呪霊の存在には気付いている。向こうに回収させても行き着く先は同じだが、手持ちの指は多いに越したことはない。それにこれは、君達のテストも兼ねているからね」

「どんぐらい強いのか？」

「君のテストよりは楽だろうね」

夏油は彼等に試練を課す。とは言え病気の呪霊よりは格下。ついでに言う指の数はもう10本あるので失敗しても支障はない。

「おい」

「ん？」

脹相がわたしに声をかけてきた。今迄の表情を感じさせない声とは違う、はつきりした真剣な物言い。

「その呪霊と俺達は、どちらが強い？」

「お前らの力を見てないから何とも。というか誰が、何人行くの？」

「あーすまない。最低一人は残って欲しいな。これから人生ゲームをやるんだ」

「…だつてさ」

脹相の眉間に皺が寄った。

僅かな沈黙の後、答える。

「壊相と血塗を向かわせる」

「2番、いや弟ね」

彼らは番号で呼ばれるのを嫌う。

呪胎九相図は加茂憲倫が行った実験の産物。実験体らしく番号で呼ばれるか、死体の腐り具合から取られた名前と呼ばれるかの二択。前者の方がマシだと思うが、彼らは後者がお気に入りらしい。

もしかしたら「壊相」「血塗」の意味を知らないのかも知れない。

「という訳だ。壊相…血塗か。術式を見せろ」

「分かりました。ところで、貴方は何とお呼びすれば宜しいでしょうか？」

脹相の低い声を聞いたせいにか、こちらの声は一段と丁寧に聞こえた。

「そういえば、自己紹介をしていない。」

「幸月、それだけ。」

「では幸月、と呼ばせて頂きます。私達兄弟の力をお見せしましょう」
外に出た。今日は三日月のはずだが、生憎の曇り空。濁った光のみを地面に届けている。

壊相は指先から血液を垂らす。それは地面に落ち、そこから煙が立ち昇る。燃えるのとは違う、しいて言えば塩素に近い臭いがする。

『『蝕爛腐術』』
「『蝕爛腐術』』と言いました。触れた物質を分解させる血液を操る術式です。血塗も、同じ術式を持っていますよ」

「呪霊にも効く？」

「勿論。血液に呪力を込めていますから」
かなりつよそう。

「…ま、実際に試さないとな」

「遺骸創術『開』」
いがいそうじゆつ ひらき

ただ浴びせるだけでは芸がないので、少し離れた場所に的を作った。

「それは……」

「それを出したのがわたしの術式で、出したものは人間。早速試してみるといい」

「…分かりました」

壊相は的に血を浴びせた。どうやら、遠距離攻撃はお手の物らしい。

それは裂けんばかりの音を出し、わたしの術式が崩れる。

「多分勝てると思う。強いなお前」

「そう、ですか」

かなりつよかった。

遠くの相手にも当たるし、分解のスピードも早い。殺傷能力の高い術式と言える。

「弟さんも、似たような感じ？」

「ええ。私と違い、血の毒性は低いですがね」

「えっ毒あるんだ…」

触らないで良かった。

「壊相と血塗、2人で行くのか。じゃあ頼んだよ」

「わたしも行っていい？」

「いいけど。理由は？」

見透かした表情、と言えはいいのか。わたしに向けられるのは初めてだ。

微笑んではいるが、目は口程に物を言う。懷疑で頭がいっぱいなのか。

「そう疑うな。暇つぶし」

「えー、幸月も人生ゲームやろうよー」

真人が入り込んできた。手にはもう4色の駒を持っている。

「…具体的に言う。もうゲームやったからお腹いっぱい」

「テレビゲームとボードゲームは違うじゃんか」

「銀星囲碁しかやってない」

「将棋もやったでしょー」

「どっちもボードゲームだろ」

ボードゲーム大好きかコイツ。本当にやめて欲しい、負けたくない。負けたくなかった。

「いいよ。気分転換も大事だ」

「4人でやりたかったなあ」

「3人でも出来るだろう?」

夏油の表情が和らぐ。猫がするような芝居がかった笑みには変わらないが、見えて毒にはならない。

「脹相、とか言ったか」

「ああ。何だ」

変わらず抑揚の少ない声、視線すら合わせない。

コイツは嫌いになりそう。

「カエルって知ってる?」

「…知識としては」

「血塗はそれに似ている」

「何だと?」

体温低そうな声で聞き返してきた。片眉を上げる、感情が無い訳でもないのか。

「キレイな。褒め言葉だ、ある意味ではな」

「どういう意味だ」

「カエルという名前は、『帰る』とか『変える』にもなる。縁起がいいぞうだ」

スピリチュアルなど信じていない。言葉遊びだ。

「…帰る、か。そうか、そうだな。」

今度は分かりやすく顔が綻びた。

「壊相、血塗」

平坦、だが諭すような声で彼らに語りかける。

「必ず、帰ってこい。俺達は、三人で一つだ」

「…はい、兄さん」

「兄者あ。俺たち、がんばるぞお」

夏油達は部屋に戻り、残されたのはわたしと壊相、血塗の3人。

「さてと、行こうか」

「幸月」

壊相がわたしの名を呼んだ。何故か手に胸を当てている。

「何？」

「ありがとうございます」

「…」

別に、呪胎九相図が可哀想とかそういう感情はない。

カエルが好きなだけだ。

「…行く」

何時の間にか雲は晴れ、朗らかな光が道を照らしていた。

第八話 起首雷同

せせらぎが聞こえる。

谷底が月明かりに照らされて、川は絹糸のように流れる。その糸を辿るようにして、九相凶くそうずとわたしは歩いていった。

「兄者あにじやあー、よるってきれいだなあ」

「ええ、本当に…」

九相凶達は兄弟の世界に入り浸る。

わたしは：壊相の背中を見たくない、というか近くを歩きたくないので1人だけ前に先行していた。

（気まずい）

何時の間にか2人と1人になっている。まあ、兄弟の存在だけを頼りに生き続けていたらしいので、兄弟ファーストになるのも理解はする。

孤独には慣れた、ずっと一人だった。だが、一人でいる時の孤独と集団の中で感じる孤独は質が違う。集団の中でこそ孤独は浮き彫りになるのだ。

今凄く実感している。

とはいえ兄弟の世界に割り込む気は無い。真人とかなら、空気読まずに入ってそうだが。

「狭く暗い檻とは違う。星も月も、空もある。世界は広いですね」

「幸月も、そう思いませんか？」

突然、壊相が話を振ってきた。

「：昔の夜の方が好きかな。今の夜は明るすぎる」

「そんなに変わるのでですか？」

「輝きの少ない星ほど、暗い方が見えやすい。今は山にいるから、そこそこ綺麗な夜だけど」

「なるほど…」

はじめましてから2時間も経っていない、お互いの共通点など分からない相手。返事しやすいよう話題にしてくる辺り、壊相は意外と気遣いのある男かもしれない。

服装のTPOは弁えてないけど。

「貴方も呪物だったのですね」

「何で？」

「昔の夜、と仰っていたので」

「当たり前。お前らと同じ、元呪物の受肉体」

「え”、オマエも俺達とおなじなのかあー」

「…何年、呪物として在り続けたのですか」

呪物トークだと…話の引き出しが狭すぎる。胎児の記憶などあるはずないので仕方ないか。

「千年」

「!？」

「あーいや、別に淋しくは無かったよ」

「そーかあ？俺だったら、兄者達がいなときさみしいぞお」

「その辺は慣れ」

「慣れたくはないですね…」

話題の重さとは裏腹に、気詰まりになった雰囲気や和らいでいく。「何が一番きつかった」とか「何を考えていた」とか、思い返すと語れることがいろいろあった。

「千年前の夜は、どのようなものでしたか？」

「流石に覚えてねーよおんみょうじ陰陽師じゃあるまいし…」

そんな会話を続けていくと、何時の間にか目的地に到着していた。

「おーでっけーなあ」

「これが…」

八十八橋。埼玉県の名所「鯉の口峡谷」に架けられた高さ70メートル程の大橋であり、自殺の名所でもある。

橋には特徴のある事故防止の柵が両サイドに立っているが、自殺防止も兼ねているのかもしれないと、ふと思った。

橋から谷を見下ろす。石英斑岩の岩肌が露出して、ちよろちよろ流れる川が見えた。白い岩肌には紅葉よく似合うだろう。暗くてよく見えないが。

「任務は、宿讎の指を回収して持ち帰ること。危ないと判断したら撤

退し…は？」

いる、誰が？感じる、何を？…分からない。

「どうしましたか？」

壊相の声が聞こえた。

忘れた時を取り戻すように、息を吐く。振り返ると、怪訝な顔をしてこつちを見ている。

「…イレギュラーがいる、最低一人」

「先客かあ？」

「呪霊と最低一人のイレギュラーはわたしがやる。他にもイレギュラーがいる場合、お前らはその足止めを頼む」

「足止め、でいいのですね？」

「殺す必要はない。別に殺してもいいけど」

任務は飽くまで指の回収。九相図のテストは後回しでも問題ない。

「承知しました。血塗、私達は時間稼ぎをしましょう」

「わかったよ兄者！」

兄弟の返事を聞いた後、わたしは谷底に降りた。

* * * * *

伏黒恵をはじめ東京校の1年生3名は、連続怪死事件の元凶がいると八十八橋に来ていた。

これは、正規の活動ではない。本来なら手に余る任務だが、伏黒の義姉：津美紀も八十八橋の呪いに関わっている可能性が高く、今すぐ祓いたかった。

川を渡って呪霊の領域に入る。上も下も巨大なフジツボのようなもので埋め尽くされた地下空間、元凶と思われる呪霊が姿を見せた。

「祓い甲斐がありそうね」

釘崎の啖呵を皮切りに、3人は攻撃を始める。呪霊はちよこまか移動して鬱陶しいが、反撃はない。

祓える、と伏黒は判断した。術式範囲が広い代わりに攻撃能力のない呪霊、移動先も減り続けている。解呪も時間の問題だろう。

突然、黒い何かが地面を塗りつぶした。

「はあ?!何よこれ!」

「あの時の…っ!釘崎!!」

釘崎は既に膝まで浸かっている。虎杖が助けようと手を伸ばすが、その手にも黒が纏わりつく。

「お前らー!くそっ…!」

2人とも黒い沼に沈んでいった。自分もそうなると思ったが、沼は消え伏黒は一人残される。

(呪霊の攻撃…違う、こんな事が出来たのなら最初からやってる!第三者の術式!!)

合流したいが、まず領域の呪霊から。行動パターンが単純だったので、式神との連携で難無く祓えた。

これで安心。と思いきや、目の前に呪霊…宿儺の指を取り込んだ特级呪霊が出現する。

呪霊が伏黒に呪力を放とうとした、その瞬間。

「!?」

再び黒い沼が現れる。

呪霊がそれに沈んだ直後、領域が閉じた。

それと同時に、伏黒は一人の影を見つける。

(子ども…?)

少女だ。小さいが、制服からして中学生か。薄ら寒い風が黒髪を揺らす。何故一人、こんな時間に?

否。目の前の少女は普通の人間ではない。迷子でもない、明らかに「こつち側」の人間だ。

周りを見渡すが2人はいない。武器を影に忍ばせて少女に訊ねる。

「お前、誰だよ」

敵意は向けない。だが、両手は何時でも対応できるよう呪力を漲らせる。

「まずは、お前が名乗れ」

少女にしては低い。けれど、耳に付く声色だった。

「伏黒、恵。お前は何だ?」

「…伏黒、ね。わたしは違う」

「はあ？」

意味が分からない。

名字が被っているとしても言うのか。かれこれ15年程生きて、名字が被ったことは一度もない。自分が知っている伏黒は蒸発した義父母と、津美紀だけだ。

「どうだっていい、知る必要もない」

「重要なのは、敵だということだ」

遺骸創術、開ひらき

そう聞こえた直後、目の前に壁が出来た。

「くっ…いきなりかよー!」

伏黒は両手で鳥を模った影絵を作る。

十種影法術…影を媒介とした式神を操る、禪院家の相伝術式。ぜんいんけ

両手の親指を交差させながら手を外側に向け、形を作る。影から飛

び出す式神の名は——

【鶴ぬえ】

鳥の式神に自身を掴ませ、上に飛んだ。

見下ろすと、地面が黒で覆われている。先程の術式は少女の仕業らしい。

壁の正体もわかった。沼から瓦礫が放出され、自分がいたところは見えなくなっている。

「…これで死んだら、楽だったのに」

(特級クラスの攻撃範囲!構えてなかったらやられていた!)

伏黒はそれを見て、先日の交流会を思い出した。襲撃してきた木の呪霊、それに比類する物量攻撃。もしかすると少女は、あの呪霊と何か関係あるのかもしれない。

2人の居場所を吐かせたいが、加減は無理そうだ。

伏黒は、覚悟を決める。

【満象ぼんしょう】!!

上空からの急降下。巨躯で術師を押し潰す。

(…何だ?)

伏黒が抱いたのは、あつさり終わった安心感でも呪詛師とは言え年下の相手を祓ころしたった罪悪感でも無い。

違和感。手ごたえが無さすぎる。術師の死体を確認するが、ない。そのうえ術式も解けていない。

おかしい、再び鶴を出して備える。

「ッ!!」

左肩に痛みが走り、伏黒は僅かに声を漏らした。

織物が勢いよく伸び、刃のように切ったらしい。

伸びてきた先を見ると、傷一つない術師がいる。

「玉犬ぎよくけん【渾こん】」

伏黒が犬の影絵を作ると、黒に白を混ぜたような毛色の式神が現れた。

それは爪を振り下ろすが、術師は沼に沈むようにして避ける。直後、今度は右の太股を切られた。玉犬が反応するも直ぐに姿を消す。

(玉犬の呪力探知が機能していない、奴の術式が濃すぎて分からないのか、なら…)

小指と人差し指を伸ばし、親指と残りの指をくっ付ける。それにもう片手を乗せて頭を作ると、象の形が現れる。

「もぐら叩きは、うんざりだ」

【満象まんしやう】

鼻から大量の水を放出し、地面の黒を押し流す。

気付いた術師が体を出し、術式を再発動させる。

その隙を伏黒は見逃さない。すぐ満象を解いて渾で接近、術師を拘束する。

「…はあ」

「抵抗しても、嘘を並べても祓ころすう、いいな!!」

術師を地面に叩きつけ、刀を術師の首に当てた。

このまま尋問を始める。

「2人を何処にやった」

「さあ?」

手を折った。グキリと鈍い音が鳴る。

今の伏黒は時間が惜しい。2人の気配を探っても分からないほど遠くにいる。連絡も無い。

トラブルが起きている。もしかしたら自分以上に面倒な相手かもしれない。

答えなければ今すぐ被^{ころして}つて、2人の搜索を始めるつもりだ。

「最後のチャンスだ。2人は何処にいる？」

「自分で探せ」

「…そうかよ」

首を切った。血が噴き出し、地面を赤く濡らす。

仕事柄、人間を手に掛けることもままある。だが年下の相手を殺めたのは初めてだった。

思う事も無くはない。だが今やるべきは、2人を探すこと。

「玉げ……が、あ？」

伏黒の胸を、錦の刃が貫いた。

* * * * *

「…普通殺すか？」

少女は反転術式の使い手、切り傷くらい直ぐ治せる。後は油断した相手を背後から貫くだけだった。

男の胸から錦御機^{にしきのみはた}を引き抜く。元から鮮やかだったが、今は別の色で鮮やかになっている。

「生きている」

男の服は裂けているが、男に傷はない。少女の呪力は、人間を治してしまうからだ。

そこに少女の意思はない。殺したい人間でも、呪力を込めた攻撃では殺せない。目の前の伏した男のように、気を失わせるのが精々だ。

ならばと少女は、沼から包丁を取り出す。何の変哲もないタダの包丁、それは月明かりに照らされて鈍い光を反射する。

「難儀な血だな…お互いに」

包丁を振り下ろす。

その瞬間。

ぞくり。

何か、凄まじい気配を感じた少女は、思わず男から飛び退いた。意図しない、恐らくは自身の本能による動きで、少女にとって初めての経験だった。

(…しまつ、た!!)

男は立ち上がり、構えをとって何か唱えている。

一からやり直ししか、違う、この気配は何だ。思考は纏まらないが、少女は術式を発動させる。

唐突に、男は笑った。

「やめだ」

「……は？」

両の手を上げている、降参だとも言うのか。

「やってやるよ!!」

ダメだ。少女はこの男を、殺さなければならぬ。何故かは分からないが、そういう心があった。

「領域展開」

男は手を結ぶ。何を象るでもない、強いて言うなら心の中か。

足元から黒の奔流が溢れ出す。

「【嵌合暗翳庭】」

暗い黒は、黒い沼を塗りつぶす。

第九話 神有月

かんこうあんえいてい
嵌合暗翳庭

影が世界を支配した。液化したそれは黒い波となり、谷底を塗り尽くす。世界の主、伏黒の胸にあったのは、一つの確信だった。

(似ている)

十種影法術は影から式神を召喚し、影自体を利用する術式。相手は黒い沼から物質を具現化し、また沼自体も利用していた。式神の有無こそあるが、凄く似ている。

「ハハッ!!」

笑った、自分の矮小さを。随分と窮屈な事をしていた。いい使い方がある、目の前に!

脳を絵具にして世界を彩るような万能感。伏黒はそれに身を委ね、術式を発動した。

ざぶんと、影が波立つ。

不意に重さを感じた少女は足元を見る。蛙の式神、それが幾重にも折り重なって捕えていた。祓おうとしたが、その隙を突いた男に頬を蹴られる。反射的に錦御機を伸ばすも、男は影に溶けてそれを躲す。

「…好きじゃやねーか!もぐら叩き!!」

遺骸創術、開ひらき。影に身を隠すのなら、影ごと吹き飛ばす。少女はそう考えた。

「あ?」

術式が発動しない。というより掻き消される。

領域には中和作用があり、地面に広がる領域も同様術式を中和する。そこまではいい、問題は少女の術式にある。

遺骸創術の『開』は、地面にしか展開できない。作用は中和なので集中すれば術式は使えるが、確実にこの男と領域が邪魔になる。

男の手札は増えている。対して少女は起点を潰され、残る手札も見せた。この状態で再び、男の意識を奪えるか?

「ふざけるな」

影に潜る、これが厄介だ。意識を奪おうにも当たらない。手にあるのは錦とただの包丁のみ。

(くそ…っ)

今になって、自分の判断を悔いた。

少女は呪術師との交戦を基本的に想定していない。準一級以下かつタイマンなら術式次第で勝機あり、その程度。だが実際には男の成長を前に、追い詰められている。

(呪力切れまで粘る…違う、時間をかけて困るのはこっちだ。仲間を呼ばれたら終わる)

今ある手札で何とかするしかない。少女は、腹をくくった。

手はバレた以上、今この男に勝つのは不可能。なら全力で逃げる、そう思考を切り替えた。同時に、錦を切り刻む。それを握りしめ、術師の方に構えた。

「最大出力、錦御機」

幾重にも重なった錦は音速を超え、男の方へと伸びる。

それは軌道上にあった黒い波、黒い式神の全てを押し退けて、男を岩壁に叩きつけた。

地を塗らす影が飛び散った。その下を水が流れ、少女の足首に付着した黒を流れ落とす。そういえば、ここは川だ。

違う、今やるべきは生死確認。土煙が晴れる。白い岩壁には血がべっとり、付いて、いない。

血と呼ぶには黒すぎる影が、岩を滴り落ちる。

どすり。

術師の胸を、式神の爪が貫いた。手にあった物がこぼれ落ち、滲み出る血は服を染める。

「死んでねえよな？」

「…二度はないか。残念」

「(生きてるのかよ)最後に言い残すことはあるか？」
生殺与奪は伏黒にある。

呪力を少しでも感じたら殺す。玉犬の爪を振り上げ、頭を抉り出せる。

「5分ぐらい語っていい?」

「一言で終わらせろ」

「なら、そうだな…また会おう」

そう言った直後。術師の呪力を感じ、首まで爪を振り上げた。

“まで”というのは、そこまでしか爪が届かなかったから。

爪が届く前に首が刎ねた。喉の内側から伸びた錦が、術師の頭を吹き飛ばしたのだ。

(逃げる気か!)

術師は勢いのまま肉体の再生を終える。

この領域は、結界で閉じていない不完全な領域。故に領域外に逃げる事は、確かに出来る。だが飛んだ所で運よく領域外に出るとはとに限らない。

そもそも、

「鶴!!」

空も領域の内なのだ。雷を纏った鶴の爪が、少女を領域に叩き落とす。

「終わりだ」

落下先は伏黒の居る地点。無数の式神を出して待ち構える。

「遺骸創術『開』」

黒い沼が現れた。そこから瓦礫が押し寄せ、式神を祓っていく。

「な…っ!」

意識外の攻撃。式神が盾になり、伏黒は何とか身を守ることは出来た。だが、術者は

「…退いてやる」

既に沼の中に浸かっている。伏黒がいた場所にまで、術式の範囲を延ばしたのだ。

沈んでいく術者に玉犬の爪を振り下ろすが、手応えはない。

「くそっ!!」

逃げられた、その事実が悪態をつく。情報を得ることも、殺すことも出来なかった。得たものといえば、残された錦の呪具だけか。地面に広がるそれを見て、異変に気づいた。

錦の織物が縮んでいく。

「…成程な」

それを見て伏黒は領域を解く。それと同時に、術者の逃走手段を理解した。

この呪具の術式効果は伸縮。正の呪力で伸び、負の呪力で縮む。そして負の呪力のほうは、伏黒の領域に触れるだけでも効果はあるらしい。

それを利用して、領域を薄めた。薄めた地点に集中して術式を発動し、そして成功したのだ。

首を刎ねたのは、この狙いに気付かせないため。上に術者がいれば、足元が疎かになる。

「玉犬『渾』」

思考を巡らせる間に、焼き切れた術式が回復した。領域展開による消耗。余力はないが、やるべき事がまだある。

「二人を探せ!!」

死ぬなよ虎杖、釘崎。心の中で願いながら、岩壁を駆けた。

壊相と血塗は、別の場所に引き摺り込んだ男と女の術師2名と交戦する。一時は2人の蝕爛腐術で追い詰めるも、女との術式の相性と男の猛攻により形勢は逆転。

(気づいた時には、術式を解いていた)

蝕爛腐術の“極ノ番”『翹王』と、腐蝕の『朽』は併用できない。『翹王』で攻撃して『朽』の再発動を試みる。

だが術師達の意識は深く研ぎ澄まされ、黒い火花が彼らにほほ笑んだ。『黒閃』、打撃との誤差0.000001秒以内に呪力が衝突した

瞬間に生まれる空間の歪み。呪力は黒い稲妻の如く光り、その威力は平均で通常時の2.5乗。

右肩ごと腕を吹き飛ばされた壊相。起き上がらない血塗。
(死ぬな弟よ)

「兄者アアアッ アッ!!」

血塗は何とか生きており女の背後から襲いかかる

「…まだ、こっちは見せてなかったわね」

が、女の手札はまだ残っている。芻霊呪法すうれいじゆほう『簪』。血塗に刺さっている釘に呪力が流し込まれ、そして祓う。

「遺骸創術、『開』」

青い肌の呪霊を錦の織物が覆い、そして4名の足元を黒い沼が濡らす。

錦が伸びてきた先には少女が立つ。顔は分からないが黒い学生服。その詰襟の上から花柄の羽織を着用しており、やけに目立つ。さつき移動もこの少女の仕業か。

乱入者、しかも子どもだ。一瞬思考が停止するが、虎杖と釘崎はその狙いを理解した。

「逃げんな!!」

「いいや逃げるね」

吠えるも虚しく、黒い沼は乱入者達を隠す。

「釘崎!」

「ちっ、分かってるわよ!!」

残された男の右腕。それに藁人形を乗せ、『共鳴り』を発動する。相手の一部に呪力を打ち込むことで、対象本体にダメージを与える呪術。相手との実力差や欠損部位の希少価値によって効果にムラがあるが、術式範囲の制限は緩い。

呪霊は祓った、男も致命傷。逃げようがこれで仕留める。

「…え?」

術式は不発に終わった。共鳴りは生物・無生物を問わず有効な呪術。死体相手に使ったことはないが、対象が死んでいたとしても呪力の爆ぜる感覚はあるはず。

「どうなった?」

「…分からない。けど、多分死んでない」

逃げられた。あの3体の目的は、宿讎の指の回収。恐らく少女が指を手に入れ、撤退した。

「……伏黒は!?」

「こつちだ」

「うおっ!ビックリした!!」

八十八橋の呪霊と対峙していたのは伏黒。最悪の事態を想像した虎杖だが、伏黒は森から姿を現した。血塗れのわりにピンピンしている。

「こつちは宿讎の指を取られた。そつちの状況は?」

「…呪霊、呪詛師と戦って、呪霊の方は被った。呪詛師は多分生きてる」

「そうか。2人とも元気そうだな」

「どこ見て言っただよ!?ていうか、何でアンタは元気なのよ!!」

「……分からねえ」

「はあ!」

話によると、反転術式で治しながら殺しにきたらしい。殺意はあったが結局少女に逃げられ、伏黒は2人の跡を追った。

「それは良いとして。今考えるべきは…」

「ああ…」

「どうすんのよコレ…」

道路に散乱する錦の織物、交換とはこの事か。

3人はとりあえず、補助監督の新田さんに連絡した。凄く怒られた。

その後錦の片づけをしていると軽トラックが来た。めっちゃ怒られた。

* * * * *

同時刻。

脹相が夏油と真人に誘われ人生ゲームに興じていた時。何か恐ろしい感覚が脹相を貫き、手が止まる。

そして、指先の駒を砕いた。

「弟が死んだ」

「そういうのわかるんだ」

血の繋がりが絶えた。弟達の異変、兄弟の『死』。受け止める自分と、理解を拒む自分がいる。

「…報告、来ないね」

夏油がスマホを確認して呟いた。弟達を殺した奴の情報はない、ならば此方から行くしかないと思ひ席を立つ。

「…あ、ああ?」

絶えたはずの繋がりが戻ってきた。

脹相はまず自分を疑う。何かの間違いだ、弟は死んだ。兄弟の繋がりはともかく、血の繋がりが戻るはずはない。これは、自分が創り出した幻だ。

それでも、扉を開けずにはいられなかった。扉の向こうに弟達がいる、その可能性が少しでもあるなら、体は勝手に動いていた。

「……兄さん」

「兄者あ……」

弟達がいた。壊相は左腕が無く、血塗は怯え切っているが、弟達がそこにいた。

脹相は駆け寄り、そして抱きしめた。まだ幻を見ているのか、違う。これは現実だ。息遣い、体温、血の繋がりがそこにはあった。

「ごめんな。ごめんなあ……」

最初に脹相の口から出た言葉は安堵ではなく、謝罪だった。

危険な任務に弟達を向かわせ、結果傷つけてしまった。その間自分

は人生ゲームなどやっていたのだ。自分が行くべきだったと、脹相は吐き出した。

「私達は、兄さんを許すよ。兄弟が苦しむのは見たくない、そうでしょう？」

「兄者あ、俺たちはだいじょうぶ。だから、なかないで」

「……ああ、すまん。情けない、お兄ちゃんでごめんなあ」

「もう……泣かないでよ兄さん」

「これは違う涙だ」

おおよよする弟達を前に、脹相は涙を拭うが止まらない。いつそ赤血操術せつけつそうじゆつで止めようか、赤くない血液でも操れるのか。そんなことを考えていると、壊相を支えていた少女は脹相に彼を預ける。影に隠れ、少女の顔は分からない。

「……気分が悪い。わたしは帰る」

「ああ。いや待ってくれ」

「待たない帰る」

黒い沼の中に少女が沈み、そして沼ごと消えた。残された兄弟達を三日月が照らす。

「ああ、行っちゃった。彼女に家まで送ってもらいたかったのだけど」

何時の間にかアジトから出ていた夏油が愚痴る。その横に居る真人は、何故か腹を抱えている。

「……ふふっ、アツハ！ハハツ!!」

「どうした真人」

「ハハハツ……ああごめん。つい……クフツ」

真人の嗤いは止まらない。

「愛情、憎悪、嫉妬、どれでもない。いや、どれでもある！」

魂の代謝。幸月のそれは、死者に対しては全くの『無』だが、生者に対してはそれなりにある。だからこそ、その魂を解き明かしてやりたいと考えているが、あの揺れはどのケースにも当てはまらない。

知的好奇心は満たされない。真人は少女にますます興味が湧いた。

「何があったんだよ！俺も、行けばよかったなあ……アツハハツ!!」

月に照らされたその顔は、酷く歪んでいた。

第十話 わずらい

(……?)

ぼんやり目覚めると、見慣れた天井が目に入った。いや、少し違和感がある。天井が近い。

何度か目をぱちぱちさせる。今居る所は二段ベッドの上の方だが、ここで寝た記憶はない。とりあえず起きようとして、異変に気付いた。

熱がある。病気知らずなのでこれが高いのか分からないが、気分が悪いのは確かだ。頭に鉛が詰まり、体中を虫が這うような悪寒がある。

(なんで?)

昨夜は…だめだ頭が重い、思考を止める。どうでもいいことに気力を使うのは宜しくない。風邪?というものは思ったよりきついらしい。

ふう、と深い溜め息をついた。大人しく寝る。体がいうことを聞かない、この感覚は久方ぶりだ。思わず苦笑いが零れる。

不意に左側…ベッドに付けられた梯子から、物音が聞こえた。

「辛そうだね」

「……前髪」

夏油がわたしの顔を覗き込んできた。凄くニヤニヤしている。

「びっくりしたよ。九相凶達をここに連れて来たら、君が倒れていたんだ」

「…褒めてつかわす」

思い出した。昨日は本当に疲れて、途中で倒れたのだ。玄関に入った辺りから記憶がない。それを見て寝かせてくれたようだ。

それは良い、良いのだが。

「病人を二段ベッドの上に寝かせる奴おる?」

この部屋には5つの寝具がある。元は九相凶が使う家だったので布団が3つしかなかったが、わたしが来たので二段ベッドを用意して貰った。1段目は机、2段目はベッドになっており、側面には板が打

ち付けてある。

これを部屋に置くことで、机とベッド、さらに九相図とわたしを隔てる壁の役割を持つのだ。我ながら頭が良い。ベッドが合わなかったので布団も用意して貰ったが。

「高い所が好きかと思つて」

「床に布団が敷いてあるだろう」

「気づかなかつたよ」

「絶対嘘」

九相図ではなく、夏油の作業らしい。好感度が一つ下がった。今のは体では一挙手一投足に重さがあり、降りづらすぎる。これでは熱さまシートを取りにいけない。

「裏梅うらつめに来て欲しかった」

「来てないけど、会いたいの？」

「…目の供養」

「そのまま伝えておくよ」

「やめておねがい」

裏梅は、綺麗なおかつぱの白い人だった。

悲しいかなこの連中は、花御はあれど華がない。その中にぼつんと佇む彼女は宛ら、雪原に咲く一輪の花。会ったのはビーチだけど。

「じゃ、良くなつたらまた来るから」

俯いた夏油はふっと起き上がり、垂れた前髪が左頬にへばり付く。あの髪思い切り引つ張りたい。そして夏油は、ギシギシと梯子を降りた。

「あの、看病は…」

「九相図がやるから」

「マジ？」

不安しかない、あの兄弟はほぼ赤ちゃんだ。夏油に残つて欲しかったが、そそくさと帰った。薄情者め。

「うそ…」

弱弱しい声が漏れた。この家に居るのはわたしと、あの三兄弟だけ。何をされるかわかつたもんじゃない。その上やる事もないし、

あつたとしてもやれるだけの気力もない。

この現実から逃れるため、瞼を閉じる。思考を止めるように努めたせいか、眠りはすぐに訪れた。

* * * * *

こんこん。

「少し、いいですか？」

ノック音。それとドア越しに動く気配を感じ、少女は目を覚ます。一瞥すれば、褐色のシルエツトが見える。壊相えそうの声だ。被っていた毛布を隅にやり、上体を起こす。

「…どうぞ」

「失礼」

壊相はお辞儀して部屋に入った。見下ろすと床に水桶が置かれ、中でタオルが揺れている。静かに戸を閉め、彼は口を開いた。

「お身体は？」

「マシにはなった」

食い気味に少女は言った。無理やり力を込めたような声で、調子を隠せていない。

「これを」

壊相は上に手を伸ばし、体温計を少女に手渡した。それを脇に挟んで少し待つ。数瞬の間、沈黙が部屋を覆う。

ピピっ、と音が鳴った。

「38.8度」

「辛いようなら、横になっても」

「いや、いい」

そう言つて体温計を壊相に返した。替わりに濡れたタオルを受け取り、おでこに当てる。ひんやりとした感覚が、少女に少しだけ余裕を与える。

壊相が少女のもとに来たのは、看病のためだけではない。一拍置いて調子を整える。そして壊相は、口を開いた。

「ありがとうございます」

今言うことではありませんが、壊相は付け加えてそう述べた。頭と足で90度になるほど丁寧にお辞儀する。

「指と右腕で釣り合うか？」

嘲るような声で少女は問う。誰を笑っているのかは少女にもわからなかった。

「兄弟の為なら安いものです」

「その考えは止めておけ。取り返しがつかない」

「…それ、貴方が言います？それに、弟の分も含めてますので」

壊相は、無い右腕を確かめるように肩を擦る。

壊相からすれば、少女の方が己を省みないように見えた。反転術式で体はともかく、確定した死までは戻せない。

もし私も反転術式が使えたら、こうなるのかもしれない。少女の高熱も無理のせいだと、壊相は考えていた。

だが、他人がとやかくいう事でもない。自分にも譲れない“拘り”はある。壊相はこれ以上の追求はしなかった。

話題を変えようと、壊相は机に目を向ける。盆が置かれており、コップの水は減っているが、粥は冷めている。クーラーの風にさらされたせいも、米はぼろぼろで固い。

「ごはん、食べなかったのですね」

「…え？」

体調でも聞き出そうと思ったが、少女は困惑するだけだった。それを見て壊相は、「あ、夏油の奴何も言わなかったんだな」と察した。

「すまない、気づかなかった」

夏油もだが、少女の鼻も悪いらしい。または気付くほどの余裕もないか。

「いえ、お気になさらず」

「夏油じゃないだろ。誰が作った？」

「血塗ですよ」

「…器用だな、血塗クン」

元は普通に生きていた少女と違い、呪胎九相図が感覚を得たのは受

肉してから。器になった人間から料理の知識はあっても、作るのは初めてのことだ。この看病も、彼らにとつて初めての経験になる。

「ゆっくり休んでください。無理に食べなくても良いですからね」

そう言うのと壊相は梯子を下りて、部屋から出る。

また一人になって、少女は気付いたことがある。

「あ、降ろして貰えば良かった」

片腕の壊相には難しい。それに気づいたのは、もう少し後だ。

ボタン。勢いよくドアの開く音がした。ドタドタと何かが入ってくる音もする。

「げんきかあ〜」

「…そこそこ」

特徴的な声で、血塗けちずだと気付いた。再び起き上がり見下ろすと、額の人面と目が合う。うへの顔は素体の名残で、本来の顔は大きな口の方だが。

「そこそこ？どれぐらい、げんきなんだあ？」

「本来の調子を10として、6ぐらいかな」

血塗は「そこそこ」の感覚を知らなかったが、6割もあれば「そこそこ」らしい。血塗は一つ、賢くなった。

「…そうだ。ちよつと机の下に行つて」

「どうしたあ」

疑問に思いつつ、血塗は言われた通りにした。何やらゴソゴソと物音がする。

なにしてるんだあ、と思つた瞬間。上から少女が落ちてきた。ぽきりと嫌な音がして、血塗は慌てて駆け寄る。

「え？なにしてんだあおまえ」

血塗は心配というより困惑していた。梯子ではなく2段から飛び降りたのだろう。腕がぼつきり折れている。

「まあ見てろ」

少女は折れた腕を真っ直ぐに固定し、呪力を患部に当てる。少しして腕を振ると、何事もなかったかのように元に戻っていた。

「反転術式…簡単に言うと、肉体を癒す力だ。受肉体は呪霊と違い、肉体の治癒は難しい。これが使えないなら、今度は無茶しちやダメだぞ」

少女は、子どもの扱いには慣れていない。故に道理を理解させようと、実践で示すことにした。体を張って伝える姿勢は評価に値する。「こんど？なんのことだあ」

少女は、耳を疑った。いくら具合が悪いといっても、流石に耳まではやられていない。疑ったのは血塗の言葉だ。

死んで学べる機会など、滅多にない。馬鹿は死ななきや治らない。という表現もあるが、血塗はそこまで馬鹿ではない。

「…昨夜のこと、覚えてないの？」

「んー…あんまり、わからねえなあ。はじめて兄者たちにあえたのに」
「ああ、成程」

これは呪いだ。頭の方をよく見ると、呪力の残穢ざんえが残っている。怯えた弟を見兼ねて、兄が夏油に頼んだのだろう。昨夜のことを忘れるように。

まさしく、骨折り損。

「血塗。お粥を取ってくれないか」

「おーいいぞお」

触れてはいけない話題を察知し、少女は別の話に切り替えた。

一方で血塗の弾む声には、「待ってました」という響きがある。盆ごと粥を持ち、そして布団の上に乗せた。

「どーぞー」

「ありがとう」

礼を言い、スプーンで飯粒を掬い取る。ぼたっと重い感触からお米の粒は細かく、粥というより重湯に近い。大根の葉と、ほぐした卵も入っている。

そして少女は、冷めたお粥を口に入れた。

「…おいしい」

「だよなあ！兄者たちにもほめられたんだぞ!!」

大根の優しい味がお粥に溶け合った、あっさりとした味わい。控え

めな塩気は、献立の漬物とも相性がいい。何度も口に運ぶ、梅干しの酸味も良いアクセントだ。

「ごちそうさまでした」

少女は完食し、手を合わせた。

冷めていたので体は温まらないが、胃もたれはない。食べ過ぎていないか少女は少し心配になった。

「まだあるぞおー!」

「…ん、いや待って」

興奮した血塗に、少女の静止は届かない。空のお椀と盆を持ち、ダッシュで部屋から出てしまった。

かちやり。静かにドアの開く音がした。そちらに目をやると、白い肌の青年がいる。脹相ちようそうだ。

「ノックしろよ」

「ああ…すまん」

少女の抗議に、脹相は素直に謝罪した。兄弟ですらない…他人との接し方など脹相は覚える気もなかったが、これからひとつ屋根の下で過ごす仲だ。面倒ごとは裂きたい。

それにもう一つ、理由がある。

「話は聞いた。弟達を助けてくれたんだな」

「…そう言うなら、まあそうなのか」
「？」

「いや、忘れてくれ」

少し気になったが、助けたのは事実。脹相は追及しなかった。だが口を開いたのは、少女からだった。

「壊相の腕は済まなかった。何時もなら治せた」

少女は詫びた。

あの時の血塗は死にかけ…というか死んでいた。なので少女は三人の撤退と血塗の蘇生を同時に行い、その後「開ひら」の中で壊相の腕を治そうとした。

しかしあの空間に入った時点で、『腕の死』が確定してしまった。反

転術式でも確定した死はとうしようもない。あの空間で死が確定してしまう現象は、想定外だった。

「お前が行かなければ、弟達は死んでいた。俺達は助けられんだ」

それでも、脹相は少女を責めなかった。

弟2人で行くはずのお遣い、そこに少女は入らないはずだった。あのまま2人だけで行ったら、術師達にやられていただろう。有用性を示すチャンスだったので、退くという選択肢もない。

「ありがとう」

「っ!!」

最良の結果ではない、だが少女に悪意があるようにも見えない。悪いのは弟達を傷つけた術師共だと、脹相は納得した。

言いたいことを言い終わり、脹相は部屋を出る。

「……納得すんなよ」

返事を返す者はいない。クーラーの動作音だけが、静寂を和らげる。それが気になってか、少女は寝付けなかった。

第十一話 柄遊び

休日は、リフレッシュの時間である。

普段は呪術高专京都校にて教鞭を執り、また他の術師と連携をとることが多い庵歌姫いおりうたひめにとって、一人の時間は特に貴重だ。

というわけで、エディオンスタジアム広島に赴いた。今日はひいきにしているプロサッカークラブ：サンフレッチェ広島の試合がある。のだが、最近どうも調子が悪い。ここから巻き返してくれる事を願う。

それは良いとして。

(こう言ったら悪いけど、ラッキーね)

庵は普段、生でのスポーツ観戦はしない。興味がない訳ではなく、単に都合が合わないからだ。オフの日でも、生ビール片手に家で見るのが精々。

ではなぜ現地観戦できるのかというと、明日はこの近くで任務がある。ならばついで見に行こうと思い、馳せ参じたという訳だ。休日前にスケジュールを立て、時間を上手に使う。出来る大人はここが違う。

「なんで今なのよ」

千載一遇のチャンス。そう考える庵にとって、鞆のスマホが震えているのは面白くない。緊急の任務かもしれないので、通知は見るが。

「げっ」

五条だった。思わず声が漏れる。

この時点で赤いボタンを押しかけが、この抵抗は無意味だと思いついた。拒否したところで4、5回はブザーを鳴らされる。

最速で終わらせる。決意を胸にし、緑のボタンを押しした。

「もしもし」

『…僕だけど、なんか歌姫キレてない?』

「そうね。じゃ」

『待って!これ大事な話だから!!』

全力スルーで全て終わらせようとしたが、失敗した。出れると分

かった以上は切ってもかけ直されるだけ、大人しく聞いてやるしかない。

「何よ?」

『ふービックリした…本当に切るかと思ったよ』

「さつさと話しなさい」

『はいはい、こっから本題ね』

尖った声を聞いた五条は茶化すのを止め、早く話を進めることにする。話を終わらせたい庵にとって、喜ばしい反応である。

『もう聞いたかな? 僕の生徒達が特級相当を3体退けたって話』

「…呪胎九相図ね。全員無事なんですよ、良かったわ」

八十八橋の事件から2日後。「東京校1年の3名が特級相当を撃退」という報告は、狭い呪術界で大きな話題になり庵の耳にも届いた。話を聞いてまず学生の安否を確認し、他校事ながら胸をなでおろしたものだ。

『この“特級相当を3体”って部分の話。うち2体は九相図で間違いないけど、もう一人は別件だ』

「それって確定?」

『100%確定。僕が視たから間違いない』

五条の六眼は、あらゆる呪術を解き明かす。

学生達の証言、残された右腕や血痕の検分から、虎杖と釘崎が対峙したのは九相図だと判明した。だがもう一体…伏黒が会った方は、全く別の気配がした。

『まー別件と言っても、見当はついてるんだよね。誰だと思う?』

五条のもつたいぶった言い方からして、話の本題はこれか。

五条は終始、自分のペースで話を進める。態々クイズ形式にするあたり「相手の時間を奪っている」という想像力がないのだ。足りてないのは配慮かもしれない。

「分かるわけじゃないでしょ」

『えー歌姫は絶対分かるよ、名前も聞いてるし』

「いや、どちら様?」

事件の話は知ってても、報告書はまだない。ノーヒントのはずだ

が、名前は庵も知っているらしい。

『分からない？まー仕方ないか、歌姫弱いし』

「関係ないでしょ!」

『いや、冥さんなら答えてくれるよ。多分』

「…降参、教えなさい」

増々分からない。そもそも早く話を終わらせたかった庵にとって、到底クイズなど付き合えなかった。

『しょうがないな、教えてあげる。名前は〃さつき幸月〃』

「…っ、え」

『はは、思い出した?なあーんと僕の推理、当たってました!!』

交流会襲撃、その時に捕えた呪詛師が吐いた名前。思い出せなくて当然だ。なぜなら、庵にとつては存在しない記憶。バカの推理、学長の眼差し、目を逸らした庵、冷え切った空気。

抹消した記憶。

『いやー全て楽巖寺学長のおかげだよ。これほどおじいちゃんに感謝し』

ぴこん。

記憶を再現するより早く、赤のボタンを押していた。どうせ報告書を目にするので問題の先延ばしでしかないが、布団の中で悶絶するなら覚悟を決めてからがいい。

庵はスマホを鞆に仕舞おうとするが、アラームが先に鳴った。通知はやはり、五条悟。

「……あー、何なのアンタ!!」

電話に出ると同時に声を荒げた。先程まで静かに話していたので、周りの視線がよく刺さる。

『いきなり切るって…失礼じゃない?』

「アンタに言われたくないわよ!」

『ごめんごめん、でも話まだ終わってないから、もう少し付き合っつてよ』

「なによ?」

少し声のトーンが下がる、こっちが本題のようだ。

『飲み会の幹事の件なんだけど。どう？目星はついた？』

「…はあ」

頭の痛い案件はまだある。

今日は寝れないかもしれない。でも呪力は良く練れると思う庵だった。

* * * * *

事情聴取やら報告書やらで忙しくしていた1年3人組。殆ど任務と変わらない休日だった。

今は日曜日で、サザエさんも終わった時間。そんな折、3人は五条に呼び出された。

「見せたいモノがあるんだ。ついてきて」

また任務の話かと身構えたが、違うようだ。ほっと安堵した3人は、五条を追っかける。

「ここって…」

最低限の灯りしかついてない校舎内に入り、連れてこられたのは保健室。中には人が居るらしく、ドアの隙間から光が漏れる。

「入るよー」

ノックはせず、五条は声をかけると同時にドアを開ける。クーラーに冷やされた室内の空気が、風となって廊下に流れた。

中に居たのは家入硝子^{いえいりしろうこ}、高専の医師だ。

「ホントーに！ありがとうございます!!」

「…無理はするなよ」

開口一番、感謝を述べる虎杖&釘崎。

家入は反転術式による他者の治療が出来る希少な人物だ。誰も彼女には頭が上がらない。

「何で此処なんですか？」

ははーとひれ伏す2人を眺めていた伏黒は、気にせず質問した。

「見せたいモノがある」と聞いて伏黒は、呪具か呪物でも見せるのだろうと予想していた。となると行先は呪物を納める忌庫か武器庫にな

るが、今居るのは保健室。呪具も呪物も此処にはない。

「恵の会った呪詛師さ、呪具置いてったよね」

「ああ、はい」

現場に残された大量の呪具。「片付け出来ないのかよ」と悪態を吐き、面倒になつてまるごと影に仕舞った伏黒。それを再び影から出したとき、ビツクリするほど縮んでいた。

貴重な手がかり、それが呪具となれば時に高専の所有物になる。伏黒のうっかり案件だ。

「呪具に残つてた呪力はもう登録したから、いろいろ実験したんだよ。硝子、出して」

五条がそう言った後、家入はデスクから、折り畳んだハンカチほどの布を取り出した。

「じゃじゃーん！これが、その呪具なんだけど」

「なんか柄が違うわね」

濃淡のある紫色で染められ、渦を巻く水のような文様が描かれた織物。凄い地味。

「僕も詳しくないけど、“観世水文様”かんぜみず っていうらしいよ」

「ん？同じ呪具持つてたってことすか？」

「いや、これは君達が回収したものだ」

「柄が変わるんですね」

「そう、呪力に応じて見た目が変わる呪具。面白いよね」

「…ふーん」

釘崎はじろじろとそれを見つめる。

着物を着る機会は少ない。七五三や成人式といった人生の節目、初詣や夏祭り程度。だからこそ普段着よりも着物は妥協を許さない。

あの術師が使っていたのは、もっと派手な柄だった。赤い布地に、やたらとリアルな草花が円形に散りばめられた織物。正直自分の物にしたいくらい、綺麗だった。

「五条先生も反転術式使えますよね。何で家入さんが持つてるんですか？」

「この呪具は、生み出した正の呪力を外にアウトプットして流し込む

必要がある。でも僕の反転術式だと、外へのアウトプットは専門外。だから硝子にやってもらったって訳」

「家入さん、私この柄好きですよ！」

「そうか」

五条が関わってないと分かり、釘崎は布切れが高級品に思えてきた。流れる水の情景には、透明感・清涼感がある気がする。よく見ると貴いオーラが出てる。気もする。

「等級は付けたんですか？」

「それが難しいんだよね。伸ばすには正の呪力のアウトプットが必要だから、使い手がまー限られる。件の術師みたいに使えるのは、乙骨くらいじゃないかな」

「逆なら良かったのにね、先生」

「いや、逆だと世界滅んでるよ」

「…え？」

「しようこー。ちよつと借りるよ、返さないけど」

五条はコーヒーを淹れる。カップから湯気が立ち、室内に独特の芳香が漂う。そしてカップに、見ているだけで胃もたれしそうな程の砂糖を投入した。

「先生、ちよつと飲ませてよ」

と一口だけ飲ませてもらった虎杖は、一瞬顔を強張らせた。

「なんか、頭がすつきりする」

「特製マイブrendドコーヒーだからね、美味しいでしょー」

美味しいとは一言も言っていない。

ずずつと劇物を飲み干した五条は、おもむろに口を開いた。

「逆ってことは、負の呪力で伸びるってことでしょ？それだと扱える術師は大勢いるけど、危険なんだよね。この呪具は、ほんの少しの負の呪力：それこそ呪力漏出にも反応する」

「つまり、世界が埋め尽くされる。ド○えもんの『バイ○イン』みたいな感じ」

製作者もそれを分かっていたのだろう。放っておくと増えるよりは、消える方がマシだ。

「…使いづらいわね。保存するのも大変じゃない」

着飾った自分を想像していた釘崎。絹の耐久性は100年とも言うが、これでは1年も持たないではないか。

「これはこれで使い道はある。適当なものに巻き付けるだけで、大概の呪霊は一撃で祓えるよ」

「簡易的な神具、ですか」

「それだけじゃない。これ自体も正の呪力を纏ってるから、応急手当にも使える」

「へえー便利だね!」

思っていたより有益な収穫だ。反転術式の使い手は希少で、何時も手が空いている訳ではない。正の呪力を保存できるなら、助かる命もグツと増える。

「大量生産は乙骨の帰国を待つてからだけど、それまでは家入に頑張ってもらうかな。取り敢えず10mくらい」

「…」

眉間に皺を寄せ、難しそうな顔をしている。簡単なことではないようだ。

「まーいずれお世話になるかもだから、覚えといてね。じゃ2人は解散! 恵は残ってて」

「?はい」

伏黒には、まだ用があるらしい。五条は2人を見送った後、伏黒の方へ向き直す。

「例の術師について、恵の口から聞きたい」

五条は目隠し越しに伏黒を見る。いつも軽薄な笑みばかり浮かべているが、今は違った。

「…黒髪の少女でした。身なりは制服でしたが、身長は低かったの少し下かも知れません。それから…」

「その子から何か感じなかった?」

「!!」

「人を成長させるのは、些細なキツカケ。でも本人にとっては、相応の理由がある。それが知りたい」

少し吃って、伏黒なりに言葉にし始める。

「その、上手くは言えないんですけど。憎んでいるというか…親の仇でも見るような、そんな感じがしました」

「…親の仇、ね」

主観的かつ重要性は低いと判断し、報告書からは省いた部分。

だが五条はピンとくるものがあつた。

「恵はその子と面識はない。となると見ていたのは恵じゃなくて、恵の血かな」

「血…ってことは」

「ぜんいん禪院家。そこに、術師のルーツがあるのかも」

後日。

回収した呪具は家入によって複製され、学生達の手に移った。一人につき、大体1mほど。

かなり疲れていた家入の身を案じ、学生達は様子を見に行った。

「大人として当然だ。私も好きでやったことだしな」

「クマ？元からだか？」

「気にするな」とは言われても、目は口程に物を言う。相当の激務だったようだ。

家入の努力の結晶。それを手にした各方面の反応は様々あつた。

勿体ない症に罹る者。そつと影に仕舞う者。額縁に入れて飾り、1日5回のお祈りをする者。最終的に家入は崇拜の対象になり、学校中で崇められた。

家入イユ・入リスト、爆誕である。

第十二話 牛鬼、

「伏黒恵をぶつ殺したい」

「なんで？」

「ぶつ殺したいから」

復活した少女の変貌ぶりに、夏油は頭を悩ませる。真人とともに様子を見に行けば、いつの間にかこうなっていた。

最初は、熱で脳でもやられたかと思った。脳をやられたら呪力は練れないし、自分で治せない。だから夏油は反転術式を使ったが、変化なし。残念ながら正気のようなのだ。

「あまり高専関係者に接触して欲しくないけど…」

「いーじゃん、好きにやらせなよ」

夏油としては今まで通り裏方仕事に徹してもらいたいが、真人は面白がっている。伏黒恵殺すガールと化した少女。動機も理由もわからないが、真人の琴線には触れた。

「…はあ。いいよ、付き合っただけ」

「よっしや」

「ここだと狭い。外でやろうか」

「さんきゅー夏油」

「んん、俺は？」

「褒めてつかわす」

がしやんと音がして、玄関の引き戸が閉まった。

少し歩いて、山の開けた場所に行く。過去に土砂崩れがあり、そこだけは草地になっている。

「闇より出でて闇より黒く、その穢れを禊ぎ祓え」

真人の詠唱で帳が降ろされる。元々人のいない山奥だが、一応念のため。

「私を選んだ理由は？」

「似てるから」

似てるとは、術式の話。

伏黒は十種影法術で、夏油は呪霊操術。式神か呪霊かの違いこそあ

れ、汎用性の高さなら似てると言えなくもない。

「過小評価だね」

しかし夏油は特級だ。

原則として十種しか操れない十種影法術と比べて、呪霊操術は文字通り桁が違う。一緒にされたら困る。

尤も、十種影法術には操る以外にも使い道はあるが。

「私にもメリットが欲しいな。」

『負けた方は、相手の欲しい物を一つ与える』。これでどう？」

「…いいね、乗った」

これは呪術の契約で、子どもの口約束ではない。

つまり夏油は、勝つ算段が出来ている。

「二言はないね」

合図代わりに、夏油は呪霊を出す。

「こいつを祓えたら、私が相手をしよう」

『きいいええいろろおおおお』

概ね、巨大なヤドカリといった風貌。

ずんぐりとした胴体からは2対の脚と、1対の腕。手はなく鋏になっっている。

だがやはり異形の存在で、あくまで似ているというだけ。

このヤドカリには、2つの頭がある。巻貝ではなく、髑髏どくろを背負っているからだ。そして頭部も甲殻類ではない。こめかみに鍾乳石のような突起物が生えた、男。

「…鬼？」

少女がそう呟いた直後。呪霊は透明の液体を吐き出した。

「汚っ」

後ろに飛んで躲かし、同時に別の動作を行う。

呪霊の口から無数の腕が生え、それらを伸ばしてきたからだ。

「にしきのみはた錦御機」

着地を狩られる前に、伸びてきた腕を祓い除ける。

『ああ、いいいいいい』

呪霊は鋏で口を抑え、悶える。

「あれは舌かもしれない」と少女は思った。脹相が食事中に、舌を噛んだ時の動作に重なったからだ。

そんな思考を切り替えて、少女は追撃を試みる。この悶えは演技ではない、明らかな隙。

頭に狙いをさだめ、錦を伸ばす。

がきん。

しかしそれは届かなかった。呪霊が屈んで髑髏に当たり、弾かれた。

弾かれた。

「は？」

髑髏に潜む呪霊が、少女を見つめる。2つの目は、燃えるような怒りを湛えている。

『領域展開』

口は大きく開き、その中で印を結ぶ。そして、流暢な言葉で呪霊は唱える。

如何やつて発音しているのか、などと考える余裕もなく。

『齋子彼岸』

死地の渦中に堕ちる。

* * * * *

海を見ていた。

陀良のそれとは違う。非現実でありながら、ここは嫌な意味で現実的だ。むせかえるような磯の香り。肌に纏わりつく砂粒。底知れぬ暗い海。

唯一現実的でないのは、砂浜に刺さっているもの。

真っ赤なもの。赤白いもの。真っ白なもの。4枚羽根の風車があちこちに咲いていた。潮風に吹かれ、風車はからから回る。

それ以外には何も無い、見渡す限り海が広がる。だが少女はかえって窮屈な印象を受けた。曇天のせいもあるかもしれない。

「……………」

少女はがくりと態勢を崩される。足を引つ張られているのだ。見ると、親指サイズの釣針が食い込んでいる。糸は海から伸びている。それを祓おうとしたが、出来ない。髑髏と同じように、弾かれる。「(これが必中か)：鬱陶しいなあ!!」

切断は不可能と判断し、代わりに足首を切り落とした。幸い深くまで食い込んでおらず、それ以上引きずられる事はなかった。

さっさと足を再生し、二足で立つ。片足には押し返す砂の弾力と、泥の湿り気を感じる。それが少女の気に障り、もう片方の靴を脱いだ。

ひたすらに、困惑していた。

呪霊の肉体は、負のエネルギーの集積。その真逆、正のエネルギーの集積たる神具は、呪霊の天敵だ。それを防ぐのは、呪霊ならあり得ない現象。一撃で消し飛ばすほどの呪力を込めたはず。

(術式か?)

思考はすぐに中断された。

海が盛り上がって、あの呪霊が姿を現したからだ。

「何だよコイツ…っ!」

『ぶっ、ころすうううう!!』

デカくなっている。肉体だけではない、髑髏も含めて何倍も。

三角屋根の家くらいだった呪霊の身体は、10階建てのマンション並に巨大化していた。

「特級仮想怨霊 “牛鬼”^{ぎゆうき}。自信作だよ」

「…いや知らん!」

焦る少女の顔を見て、夏油がくつくつと笑う。

「じゃあ、教えてあげる。牛鬼とは、主に西日本で知られる海の怪異だ。性格は非常に残忍でね、毒を吐くし人を喰う。牛と蜘蛛を足した姿で描かれることが多いかな、けっこう有名なやつだよ」

「…開示か?ご親切に」

それを合図にしたように呪霊…牛鬼は脚を動かし、地面を這う。突進だけでも、殺すには余りあるエネルギー。

その勢いのまま腕を、少女に振り下ろした。

動きに合わせて、錦を当てる。こちらは弾かれることはなく、腕を消し飛ばした。距離があり、反応できる時間があったのも幸いした。

『うう、がああああ!!』

怯んで後退した牛鬼は、大地を叩く。

(来る)

そう思い、新たな錦を取り出した。

しかし。

確かに、走った。：体の向きを、180度変えて。

「っは」

背を向けられては、殻に弾かれる。

それを見て少女は追いかけてしようとしたが、直ぐに足を止めた。

違和感。逃げ足が遅すぎる。脚を引きずっているがわざとらしい。

消えたのは腕だ。

それを治さないのも、気になった。病気の呪霊は、直ぐに再生させたのに。

牛鬼は立ち止まり、少女の方に振り返る。にやりと嗤い、今度こそ海に消えた。

「遺骸創術『開』」

人を取り出して海に落とす。

牛鬼が吐き出した透明の液体。夏油が嘘をついていなければ、あれは毒だ。なら同じ色、この海は？

答えはすぐに出た。

石になる。

化石、いや石化と呼ぶべきか。浸かった部分から、時が止まったように動きを止めた。

「：ナトロン湖？」

海ではないものが頭に浮かんだ、YouTubeで見たやつだ。

高い塩分濃度とアルカリ性の水が、亡骸を石灰化させる死の湖である。その光景によく似ていた。

文字通りの死海。成程、彼岸とはよく言ったものだ。生者は海を渡れず、渡れるのは殺す者と殺される者。

「面倒だな」

少女が視るに、牛鬼の術式は『成長』。

回復と強化を繰り返し、敵を殺すまで巨大化する。

だが、成長は時間を要するらしい。その時間を稼ぐために、海に潜る。ヒット&アウェイに徹する堅実な戦術。

そして一つ、気付いたことがある。

「牛鬼と言ったか？呪霊じゃないだろコイツ」

「正解。よく分かったね」

硬すぎる呪霊、思い当たる節はあった。花御だ。

花御は呪霊ではあるが、それだけではない。神聖なものに向けられた負の情念が胎となり、生まれた呪霊。

純粹でない故に、真逆のエネルギーにも耐性がある。花御が少女に呪いの種子を当てたのもそういう理屈だ。牛鬼の髑髏も、それに近いものだろう。

(精霊か、いや…)

海が盛り上がって、それを見る。

先の比ではない。もはや呪霊ではなく、怪獣映画に出てきそうなサイズだ。

単純な質量はこの上なく脅威であり、吐き出す息すら潮風を生んでいた。沈まない地面には感嘆すら覚える。

「丁度良い。験すか」

三度、腕が振り下ろされる。

山が降ってくるようなものだ、当たれば人の形も留めない。

少女はそれを祓わない。布の代わりに札を取り出し、人差し指と中指で挟む。

「八種雷咬」
やくさのいかすち

空気が、弾けた。

* * * * *

「めーぐみ、お出かけするよっ」

「一応聞きますけど、禪院家ですか」

「うん」

「はあぁーっ」

行きたくねえ。ため息と一緒に、魂まで抜け出ていきそうな伏黒だった。

基本的に五条のお誘いは、公害を意味する。五条という台風の目に振り回されたがる馬鹿でない限り、普通断る。

だが今回の誘いは、公害に赴くことを意味していた。しかも断れないときた。

禪院家と伏黒の関係は、あまり良くない。

禪院家は関係を持つとうとしている。相伝術式の『十種影法術』を伏黒が継いでいるからだ。禪院家としては喉から手が出るほど欲しいが、伏黒は禪院家との繋がりを求めている。足を運んだのも片手で数える程度で、慶賀新年の返事も返していない。

「七海より長いよ、溜め息。ギネス狙えるレベル」

「五条先生だけ行って欲しかったんですけど」

「僕もそのつもりだったけどね、まー許して？」

五条も禪院家には関わりたくないし、伏黒にも関わって欲しくない。

だが禪院家が呪詛師の情報を持っている可能性は高い。厳密に言えばそれ以外の可能性がない。渋々、伏黒と禪院家のいざこざ以来使っていないかった電話をかけた。

禪院家当主の返事は『恵を寄越せ』の一点張り。五条はごねたがどうにもならず、仕方ないので2人で行くことにした。恵だけとは言われていないし。

「お待ちしておりました。伏黒恵様、五条悟様。お二方は、このフルダテがお送りいたします」

どうぞこちらへ。禪院の男は送迎車まで案内し、2人は後部座席に乗り込む。

高専も安物ではないが、それ以上に高級そうな車だ。2人乗りの後部座席は贅沢に空間を使い、座り心地もいい。だが伏黒は膝を揺らしたり、備品に目を移したり、ミラーを見たり。妙に落ち着かず、体がうろろうろする。

「何とかなるよ。だって僕、最強だから」

「…お願いします」

伏黒は知っている。こういう時は、頼りになる大人だと。

第十三話 揺籃

時代劇で使ってそのような日本家屋。居るのは着物の人ばかり。ここは何処だろうか。

そう、禪院家である。

五条と伏黒はフルダテという男に案内され、建物外周の廊下を歩いていた。

案内の男は、一室の前で膝をつく。

「直毘人様。五条様と、伏黒様をお連れしました」

そう言つて、丁寧に襖を開けた。

「入れ」

低くはつきりした声に急かされ、部屋の中に入る。そこに居たのは、七十はある御老人。

禪院家の26代目当主にして特別一級術師、禪院直毘人である。

隙あらば酒を呷る男だが、今は飲んでいない。

「では、私はこれにて」

それだけ言つと、男は去つて行つた。

三人の間に沈黙が流れる。聞こえるのは、ぎしぎしと軋む足音だけ。

それすら無くなつてから、直毘人が口を開いた。

「よく来たな、恵君」

「伏黒です」

「ふつ、相変わらずだな。……………まあ良い、座れ」

「失礼します」

机を挟む形で伏黒は対面に正座する。

五条も当然のように、伏黒の隣で胡坐をかいた。

「で、ほんとに知つてんの？件の呪詛師について」

五条は少々皮肉に語尾を切つた。伏黒を誘うための方便、と疑つての発言である。

だが、そんな疑いなど気にもせず、直毘人は首を縦に振つた。

「知っている、もちろん答えるとも。だが縛りは結んでもらうぞ」

直毘人の返答は意外なもので、五条は目隠しの下の目を丸めた。禪院家は腐っても呪術界の名門。嘘の縛りを結んでまで、伏黒を取り込む事はしない。

高専にも五条家にも無かった呪詛師の情報が、禪院家にはあるらしい。

「内容は？」

「縛りの内容は3つだ。

一つ、これを聞くのは伏黒恵のみ」

「えー？僕も聞きたいんだけど」

「最後まで聞け。

二つ、公にするのは呪詛師の情報だけだ。それ以外は話すな」

「『それ以外』とは？」

「禪院家の歴史についてだ」

「それ聞いて恵に何か得ある？」

五条の口調が軽いものから少しばかり冷めたものに切り替わった。

「損得の話ではない。

その呪詛師は千年前、禪院家の興りに関わっている」

「!!」「…ふーん」

「だが、余所者に語る歴史ではない。正直言つて…汚点だな」

そう吐き捨てた直毘人の顔には苦々しい表情が浮かぶ。

御三家の歴史は長い。加茂家のように、過去に恥じる様な事があってもおかしくはない。

最も、現代に置いて汚点は無いと言えるかは別の話だが。

「故に…最後の条件だ。

伏黒恵、お前を禪院家の次期当主候補とする」

「調子乗んなよ、ジジイ」

その声は、ぴしりと部屋の時間を止めた。

アイマスクを取ると、整った顔立ちには不釣り合いなほど、六眼に侮蔑の念が籠っている。

怒りを隠さぬ五条を前にしても、直毘人は一切動じない。それどころか、

「フフ…」

むしろ愉快だと言わんばかりの笑みを浮かべている。ピリピリとした空気の中、先に口を開いたのは意外にも伏黒であった。

彼は小さく息をつく、直毘人を見つめ返す。

「確認ですが。」

俺がなるのは、飽くまでも次期当主候補ですよね？」

「ああ。そうだな」

「そして、着任を拒否することもできる」

「その通りだ」

「……なら、いいでしょう」

「えっ!? ちよ、ちよっと待って!」

突然の契約成立に、五条は思わず声を上げる。

「どうということ? 恵、まさか承諾したわけじゃないよね?」

「しましたけど」

「じゃあなんで……」

「…はあ」

伏黒はため息をついて、次は五条に向き直った

「何とかなるんでしょう?」

「……そっか、そうだったね」

伏黒の問いに、五条は不敵な笑顔を見せた。

「ジジイ、僕からはもう何も言わない。けど、一ついいかな」

「何だ?」

直毘人は少しだけ、眉をひそめる。

「僕どうやって時間を潰せばいいの?」

「アニメならあるぞ」

「デジアドある?」

「ある」

とどこかく。

五条悟の暇つぶしと、呪詛師の情報開示が始まる。

* * * * *

場所は変わって。

「やつほー、どんな感じ？」

「真人か。外で見張って欲しかったんだけど」

「見張ってるだけとか暇すぎるもん。どうせ人なんか来ないし」

「そうかい。まあそろそろ終わるよ」

領域に侵入し、中を見学する真人。視線の先にあるのは牛鬼…ではなく、少女が出した黒い渦。

少女がそれに呪符を翳すと渦の中央が盛り上がり、それを取り込んだ。

それは大きな蛇だった。

真っ黒でありながら、黒曜石のような艶がある。

「あれも式神？術式の応用かな」

「術式と呪符を組み合わせたものだね。低級式神なら、生得術式に依らずとも呪符で召喚できる」

「八種雷蛟」
やくさのいかずち

迫りくる巨腕へと、黒い蛇が跳びかかる。

ごころおん。

海を裂くような光と、音がして。それが牛鬼の体を消し飛ばした。

背負っていた髑髏には血管のように模様が刻まれ、潮風に焦げた臭いが混ざる。

はっと我に返り、何が起こったのか理解した。

「っ、……雷!!」

「すつげえ一撃じゃん。順平の式神より強いわ」

「誰だソイツ…まあ本職じゃないからコスパは悪い。『八種雷蛟』は顕現したのと呪符のを合わせて八匹しか存在できないし、一発撃ったら即退場」

「それで八種か。でも低級にしては強すぎない？」

「一匹だけなら…多分スタンガン程度、さっきのは八匹分を纏めて使った」

「強化の倍率おかしいでしょ」

「そこは才能」

八種雷蛟やくざのいかずち。遺骸創術の黒沼と呪符を媒介にして蛇の式神を召喚する、少女の拡張術式だ。

本来の遺骸創術で創るのは失われたモノのみで、新しく創るのは専門外。

だが呪符に式神をデザインし、それを取り込ませることで、沼を肉にして式神を召喚した。

「…ま、牛鬼とやらは祓い終えた。げと…夏油?」

「そうか…君は…」

呪霊操術の強みは手数が多さだが、退魔の力で祓えない呪霊はほばいない。その上で少女に有効打を与える呪霊となれば特級呪霊でも限られる。その一体を祓われた。

「本当に、面白い」

その事実には、だが夏油は酷く穏やかで。焦りとはむしろ逆、どこか懐古的な声だった。

『牛鬼を祓ったら私が相手をする』。そういう約束だったね」

少女に向かって、夏油は手を伸ばす。掌にあるのは呪いの塊。
(まだあるか)

それは——
「うしろ」

形を成さず崩れていく。その手で夏油は、代わりに少女を指さした。

「っ、あ?」

後ろからどんと押された感覚。

「疑問に思わなかったのかい?」

呪霊を祓ったのに、なぜ領域が解けないのか」

振り向くと、水母くらげと女を合わせたような呪霊がいた。ぶよぶよとし

た白い肌。骨盤の被り物。髪のように触手が伸びて、その先端から何かの液体が滴る。

刺されたと理解するのに、少し時間を要した。

「濡れ女^{ぬめおんな}” 同じく海の呪霊だよ、こいつらは集合体なんだ。

故にその内の1体を祓ったところで、領域は解けないし祓えない」

「…は？」

「君が思ってる以上に、呪霊にもいろいろあるのさ。ん、そろそろかな」

身体が重い。もしやと思つて刺された左胸を触る。

石になっている。

白紙に垂らした墨のように、じわじわと生身を侵食する。

胸から腕へと覆い始めたところで、

「この海と同じ毒だよ。さ、どうする？」

夏油の声で、止まっていた思考が動き始めた。

身体の変化を拒むように、少女は胸を穿ち、反転術式で孔を治す。

しかし、これは。

「症状の軽減は出来ても、根本の除去は出来ない。

…ああ、そうだ。『対症療法と原因療法』つてやつだね」

毒を抜けば、呪いは解けるだろう。だがそんな余裕はない。水母の^{くらげ}

様な呪霊…濡れ女に、錦を放つ。

「……！」

するりと空を切り、目標を失った錦はひよろひよろ落ちる。

躲す動作はなかった、いや躲せる速度ではないが。

まるで当たらない事が分かり切っていたように、攻撃に対して無關心な反応。

「消える、のか…ッ！」

「シンプルだろう？」

再び。濡れ女の触手が少女を貫いた。どくどくと、石化の呪いを送り込む。

「元は、己の姿や残穢などを隠す術式。でも領域の恩恵でね、『攻撃の瞬間まで存在しない』」

姿を隠す術式と、存在を消す必中効果を使い分けている」

術式の開示による、術式効果の底上げ。

それは夏油にとって、盤石の布陣が整ったことを意味している。

「もう一つ。牛鬼はね、復活するんだ」

瞬間。底から牛鬼が這い上がった。きた。

その身体は海を押し広げ、島が隆起したかのように錯覚する。

『アア”アオ”オ”オオ!!』

復活の産声か、殺戮の狂喜か。

何れにせよ掲げ上げた鋏の手は、既に振り下ろされている。

最早、少女に余裕はない。

先ずは目前に迫る脅威を祓うべく、錦を牛鬼に向けた。

だから気付かなかった。

間合いを詰めて王手をかける、夏油に。

「余所見とは、感心しない」

『天具』

黒い八つ手の羽うち。それを扇ぐと風が起こり、巻き込まれた少女は海の彼方へ飛ばされた。

七つに減ったその羽先を、夏油は撫でる。

「その呪具、何処から取り出したの？」

「武器庫呪霊から。気配を覚られないよう、念のためにね」

「便利だね。まー俺はいらないか」

漏瑚なら欲しがりそう、という真人の言葉は、牛鬼が起こした波に掻き消された。

「つーか、俺の玩具なんだけど。死んだらどうすんの？」

ぎざ、と砕けた波が海に還る。

真人がそれに目をやると、何事もなかったかのように凧いでいた。

「人が成長するには、何が必要だと思う？」

水平線を見つめたまま、夏油は逆に問いかけた。

「……………え？何急に。禅問答でも始める気？」

真人は呆れたように肩をすくめる。

「これはサーブिसさ。人の親切は、素直に受け取るものだよ」

「ふうん。じゃあ教えてよ」

そう言いつつも、真人は真面目に答えを聞くつもりはないらしい。その視線は既に夏油から外れていた。

少しの間、沈黙が落ちる。波の音だけが二人の間に流れる。

やがて、諭すような声音で夏油は語る。

「危機意識。成長とは、理想と現実のギャップを埋める作業だ。

そのギャップに気付かせる最も手っ取り早い手段が、生命の危機という訳さ」

今みたいだね、と夏油は付け加えた。

「スパルタってやつ？古典的だね」

「そうだね。でも一番効果的な教育法だよ。古いものが、必ずしも新しいものに劣るとは限らない」

夏油の答えに真人はくつくつと笑った。

「なるほど。それは確かに真理だ」

「まあ、死んだら意味のない話だけどね」

「ホントそうだよ。もっかい聞けど、死んだらどうすんの？」

今度は、夏油も笑いながら答えた。

「その時は…その時さ」

* * * * *

奈落に落ちる。

手足に絡みつく水の感触と、全身を包み込む浮遊感。肺から洩れた泡が、空へ弾けて消えていった。

揺蕩う黒髪が、視界に映ってはまた消える。

このまま目を閉じれば、或いは。

(……………いや)

まだ負けてない。

陸に居る呪霊達を祓えばいい。『開』^{ひらく}で島ごと呑み込んでしまえば、一網打尽に出来るはず。

そう考えて、残った酸素を吐き出そうとした。

ごとり。

下で、何か崩れる音がして、体の向きを変えた。

そこにあっただのは、石灰色の地蔵。海底を埋め尽くす石の中から、頭だけ出している。

それが、もぞもぞと動いて。底から身体を這い出して、こちらを見上げた。

赤子。

首から下は、どう見てもそれだった。

強いて異常な点を上げれば、腹にある開いた切り傷。

そこから呪霊らしく、紫色の体液が漏れて。しかし赤子らしく、手足を揺らしている。

『ほがあああ、ほがアアア!!』『だああ、だあああだ!』

『むううんん』『きゃああ、きゃあああ!!』

水中だというのに、湧き起こる声はとめどなく。見える範囲だけで、優に30は超えている。

そのどれもが、同じ顔をしていた。

(……くそっ)

呪霊というのは、基本的に決まった形を持たない。人の負の感情から生まれるそれらは、多種多様の姿となる。

だが、目の前にいるこれらは違う。個としてではなく、群としての存在。

つまりこういうことだ。呪霊は、3種類いた。牛鬼に、濡れ女。そして…赤子の呪霊。

そしてこれらを全て祓わない限り、恐らく領域は解けない。不愉快だ。

脳みそが眠れと煩くて、赤子の声も喧しい。だというのに、何も出ない。

やがて光も届かなくなつて、今度こそ目を閉じた。

そして――

「りよういぎてんかい領域展開」

第十四話 名残り

水滴が肌に当たり、目を覚ます。

日が暮れたようで薄暗く、光を求めて空を見上げた。

天井には大きな穴が空いており、そこから月明かりと水が入る。落差が大きすぎるのか、水は下に落ちる前に拡散してきらきらと光っていた。

ここは地下のようだ。といつても坑道や洞窟ではなく、山に穴を開けたような、そんな場所。

(どこだ、ここが?)

意味が分からない。なんでこんな所に居るのか。

…なんで、こんな所に居るのか?

思い出してきた。わたしは、呪霊の領域展開で…

(…生得領域)

誰もが生まれながらに持つ、自分だけの心象風景。それは人によって千差万別であり、本人すらも知らない場所。

わたしは、死に近づきすぎた。だからここに來たらしい。どこか他人事のように、冷静に見ている自分がいた。

目が慣れてきて、辺りを見渡す。

落ちてきた霧は幾つかの水溜まりになり、その近くには草木と花が生えている。藍と白の、星型の花。それらが集い、夜と雲のような明暗を描く。

そして夜空には、千年前と同じ、満天の星空が輝いていた。

(そっか、ここか)

忘れるはずがない。わたしはここで、生きていた。

今度こそ、目を覚ます。

海の底は息苦しく、石の呪いが纏わりつく。

それを見て赤子共は、泣いているのか、囁いているのか。相変わらぬの煩さだ。

でも、まだ終わってない。

「領域展開」
りょういきてんかい

口を開いたせいで、水が流れ込む。それでも構わず言葉を続ける。左手は石化しきっていたので、残された右手で掌印を成す。5つの指先を揃えた形は、まるで蕾のように見えた。

そして今、花開く。

* * * * *

それに二人が気付いたのは、ほぼ同時だった。海の底から、爆発するように、膨れ上がっていく領域。

どんなものかは分からない。ただ、直感で覚えたのは、悍ましさ。触れてはならぬものに、触れたような。

「つ……領域展延!!」
りょういきてんえん

真人は叫びと共に、自身に薄い膜のような結界を張った。

領域展延：領域の必中効果や術式を中和する、防御の領域である。しかしこれは真人にとって、メリットよりもデメリットが大きい。領域展延中は生得術式を発動出来ないため、無為転変による肉体の再構築が不可能になるからだ。

だが今は、それしかなかった。領域の押し合いでは“勝てない”と、本能的に理解したからである。

夏油もまた、新たに出した呪霊で簡易領域を展開し身を守る。

塗り替えられた光景は、直前に感じたものとは程遠い、神秘的なものだった。

まず2人の目を惹いたのは、大穴の下…中央に坐す、注連縄が幾重にも巻かれた何か。

そして星空の下に広がる花の大地。降り注ぐ光と花びら。

天上より降る雫は、まるで涙を流すように。あるいは、慈愛に満ちた手つきで撫でるように。

柔らかな感触に打たれていると、聞き覚えのある声が二人の耳に入ってきた。

この領域の名は――
【花布溜内裏】

声が出た方に振り向くと、少女がいた。その半身は石に蝕まれて、とても戦えそうにない。だというのに、寧ろ穏やかな表情で二人を見ていた。

どうしようもなく開き直った顔ではない。全てのしがらみから解放されたような、そんな笑み。

「ふっ、ははッ!!」

それを見て真人も笑う。

何時しかの嘲笑では無い。単純に、真人の魂が叫んでいた。

(ここに今！殺す!!)

目の前の少女は、危険だと。

しかし同時に、歓喜していた。やっと、己の殺意を満たせると。

「…見事だ。でも、それで勝ったわけじゃない」

一方で夏油は、飽くまで冷静に、戦況を分析していた。

確かに領域は塗り替えられ、その上書きも難しい。またこの空間は正の呪力に満ちており、少女の領域展開と共に多くの呪霊が祓われてしまった。

だが、領域展延が間に合った個体がいる限り、領域が上書きされた所で、石化の術式までは解けない。その上夏油自身は、傷一つ負っていないのだ。戦いの主導権は此方にある。

ならばどうするか？

『ねえ』

長い髪に白いコート、赤い靴。女型の呪霊。その口が大きく裂け、少女に一つ問いかけた。

『わた、わた、わたし、きれい?』

時間を稼ぐ。

問いに答えるまでお互いに不可侵を強制する、特殊な簡易領域。例え相手が格上であっても、答えるまでは突破されない。

つまりそれは、答えない限り相手は無防備だということであり、またその間、お互いに含まれない者は好き勝手に動けるということだ。

この隙に夏油は再び呪具を出し、真人を含む呪霊の群れが間合いを詰める。

少女はそれらに目もくれず、濡れた前髪をかき上げ、問いかけてきた呪霊を見た。

そして、一言。

「あんま良くない」

ブチリと、何かが切れる音がした。

いや、正確には、これから切るのであろう。呪霊が糸切狭を取り出すと同時に、少女の右腕、太腿、耳、首に巨大な糸切狭が展開された。

「…それでいくか」

ぼつりと、誰に向けたものでもなく、少女が呟いた。

呪霊が鋏を握ると、それに連動して大鋏も閉じていき、白い肌から血が垂れる。

このまま肉が断たれようとした、その瞬間。

がきん。

その音は、金属がぶつかり合う音。

その出所は、挟み込まれた直剣。それに加えて刀、長巻、槍、鉞、斧、諸々。

それらに錆も刃毀れも無く、月の光を受けて、鈍い光を返していた。十か、いや百か、いや千か、いや…。

無数の剣戟が、世界を埋め尽くす。そして。

『八幡遁甲』
はちまんとうこう

その言葉を合図に、全てが回る。

音は無く、風も無い。しかしそれは、流れる時と同じ様に、決して止まらない。

全てが廻る。

塵殺というよりは、攪乱と呼ぶべきだろう。ミキサーのように回転する刃は、人間も呪霊も区別せず、全てを混ぜ込み、切り刻む。花弁と雫の中を縦横無尽に駆け巡り、やがて世界は死に濡れた。

その光景を最後に、夏油らの意識も刈り取られた。

……………。

「八幡遁甲は、回り続ける無尽の刃」

降り注ぐ水が全てを洗い流した後、少女は一人呟いた。その言葉に返す者は、誰もいない。

生き残りは少女以外にもいる。夏油は領域内に充満する正の呪力で身体を再生し、真人も魂までは攻撃されなかった。どちらも挽肉と変わらないが。

「遺骸創術の『そう』は、創であつても操ではない」

呪具の重さや鋭さを創る事は出来ても、それを操る事は出来ない。発生と消失の連続で動いているように見せかけているだけで、そこには回転のエネルギーは無い。

また身体はある種の領域であり、領域展開といえど体内に武器を具現化する事は不可能。

つまり自ら斬られに行かない限り、当たり判定が存在しないのである。

「ただじつと、地に伏せてれば良かった。嵐が過ぎるのを待つように
：初見で気付けというのも酷な話か」

ぼろり、と少女の肌に纏わりついていた呪いが剥がれる。

それはつまり、呪霊祓除の完了を意味し――

『あゝあゝーああーうああゝん!!』

「…まだ、いたのか」

夏油が隠したのか、恐怖に屈したのか。一体の呪霊が、花草の上で喚いた。

そして、呪霊の領域が解ける。

「ああゝああ…うあ…」

次第に泣き声も弱まって、呪霊の体が崩れていく。

泣けば牛鬼が守ってくれたし、濡れ女が隠してくれた。だがその2体が祓われた以上、それに反応するものなど、誰も――

ざっざ、ざっざと。

少女は、泣き声のする方へと歩いていった。

最早とどめをさす必要もないが、何となく、歩いていった。それを阻

む呪いは、既に解けている。
そして、泣き声が止んだ。

(……)

その痕跡が消えていく。肉は朽ち、血は蒸発し、石は崩れる。
残ったのは、踏まれた草の名残だけ。

「…遺骸創術」

少女は、真っ白な、小さな風車を創った。

それは回らないだろう。受ける風など、この穴底には吹かない。
その一輪を、花畑にさす。

その心は、おそらく、誰も知らない。

* * * * *

禪院家に非ずんば呪術師に非ず、呪術師に非ずんば人に非ず。

「うちの家訓だ、知ってるか？」

「…禪院先輩に散々聞かされたので、まあ」

「ふははっ！ だろうなあ!!」

禪院家は御三家の中でも、特に術式を重視する。

相伝術式こそが至上であり、それを継がぬ者は落伍者として人生を
始める。

「とは言え我らが血と相伝術式を貴ぶのも、それなりの訳がある」

『術式は遺伝するから』『取説があるから』…術師の家なら、何処も同
じでしょう」

伏黒の投げやりな言葉に、禪院直毘人はくくと笑う。

生得術式はその血統に受け継がれやすい。だから術師の家は術式
の血を代々継承し、古くから生き残ってきた。

故にこそ、特に古い相伝術式を持つ伏黒を取り込むべく躍起にな
る。伏黒にとっては迷惑極まりないが。

しかし、と直毘人は言葉を区切る。

「禪院は、それだけではない。

……ここからが、「汚点」の話だ」

ぴりりと空気が変わる。

それまでどこか楽しげだった直毘人の表情は消え失せていた。

静かになった部屋に、時計の音だけが響く。伏黒は無意識のうちに息を止めて、続く言葉を待った。

そして直毘人が口を開く。

「禪院家の祖は非術師だ」

「……はい？」

思わず間拔けな声が出た。

禪院家で術式どころか呪力すら持たずに生まれようものなら、人間扱いすらされない。禪院ぜんいんまき真希——術式と呪力を引き換えに超人的な身体能力を得た——がいい例だ。

蔑まれるべき非術師から、禪院家は始まった。家の理屈で言えば確かに、知られたくない恥部ではある。

だが、己にそんな話をされても困る。そもそも件の呪詛師に関するか？

疑念が顔に出ていたのか、「まあ聞け」と直毘人は言葉を続ける。

「千年前：術師の家系に生まれながらも呪力を持たぬその男は、呪術界から離れて生きていた」

術師の家の非術師が、どのような扱いを受けるのか。今はともかく、昔がどうだったか伏黒は知らない。

少なくとも男は、呪術界での居場所は無いと感じたようだ。

「だがある戦をきっかけに、男は呪術界に戻った」

きゅぽんと、直毘人は瓢箪の酒を呷り始める。何時も飲んでるな、この禪院家26代目当主。

伏黒は呆れた目を向けるが、直毘人的には我慢した方である。

瓢箪を傾けながら、直毘人は語る。

「かの戦には呪術師も参加し、勝利したのは男の陣営だった。その功により、男は貴族へと成り上がった」

飲み干したのか、直毘人は瓢箪を畳の上に置く。

ぶはあと、酒臭い吐息が部屋に充満し、伏黒は禪院家に行きたくない理由が一つ増えた。

その口のまま、直毘人はぽつりと呟いた。

「…男は、呪術を諦めてなどいなかった」

直毘人は目を細める。

その先に何があったのか、部外者である伏黒は知らない。

少し間をおいて、決心がついたのか、話を続ける。

「男は当時の呪術師達を金と権力で強引に束ね、“禪院”という術師の集団を興した」

「……………なるほど」

現代こそ呪術師達は手を取り合い、年々力を増す呪霊に対処することになっていく。

だが古い呪術界はあくまで個の集団で、また“上層部”なる存在によつて管理される事も無かった。

そんな中で男は、呪術師の私物化を企んだ。勿論それは反発を生んだが、男は貴族の力でもって禪院を創った。

つまり禪院家の始まりは人々を守るといふ崇高な理念でも、年々力を増していく呪霊に対処するという時代の要望でもない。ただ、男の蒐集欲を満たす為に。

そこまで理解して伏黒は、大きくため息をつく。

(今も昔も、変わってねえ)

頭が術師か非術師かの違いだけで、何も。

伏黒の中で、目の前の男に対する評価がまた下がる。

直毘人も伏黒の心中を察したが、どこ吹く風のようにだ。

「ここで終わる話ではないぞ？禪院家の創設は、男の業の一面に過ぎぬ」

「はあ…」

「その辺の非術師を攫つては“元”術師の呪物を取り込ませよつた。拳句の果てに、自分で呪物を飲み込んだ」

「はあ!」

思わず声が出た。

それほどんでもない事を、禪院の先祖はやらかしたのだ。

呪いとは負のエネルギー。それを取り込むという事は、人間にとつ

て猛毒と同じ。虎杖宿儻の器悠仁は特別なのだ。

そこまでしてやりたかった事は、つまり。

「非術師が術師に成ろうとした。結局それは叶わなかったがな。

……愚かな事よ。鳶とびが鷹たかを生んだとて、鳶は鳶のままだと云うのに」

「結局、そいつらは誰ですか？」

少し苛立ちまがいに伏黒は訊ねた。

男の話は呪詛師にも繋がると聞いたが、姿が全く見えない。そいつらとはそういう意味だ。

これ以上聞かない方がいい気もしたが……情報のためだ、致し方なし。

「男の名は、平貞盛たいらのさだもり」

「……っ!!」

その名を聞いて、絶句する。それは、禪院家とは別の禁忌禁に繋がる名前。

「気付いたか。承平じょうへい天慶てんぎょうの勝者……表向きには、武士の興りの象徴だな」

直毘人は満足げに笑い、言った。

「そして、勝者には敗者が付き物」

まるで答え合わせをする子供のように、楽しみに。

「敗者の名は、平将門たいらのまさかど。件の呪詛師、幸月姫さつきひめ……今風に言えば平幸月たいらのさつきは、その娘だ」

第十五話 平家の墮人

平将門公。

かつて坂東の独立を望んだ風雲児であり、「新皇」を自称した叛逆者。だが没した後も民衆の為に蜂起した悲劇的英雄、東国武士の祖として数々の伝説に彩られた。

また彼に勝利した平貞盛と藤原秀郷は、後の桓武平氏や奥州藤原氏繁栄の先駆けになった。

かの名は一般社会でも知るものは多いが、呪術界で知らぬ者は居ない。今もなお残る将門公の伝説は、特級呪い仮想怨霊『化身平新皇』として顕現する。

(千年前の術師…そのうえ親は特級か)

伏黒は改めて、あの夜を回想する。

大規模な術式範囲、蘇生すら可能とする反転術式、規格外の呪力量、どれも1級には収まらない。それらの根拠としては、妥当な人選である。

そして…あの殺意にも、説明はつく。

少女にとつての禪院家は仇の末裔。それで禪院の血を継ぐ伏黒を襲った…と考えられるだろう。

だが伏黒は、もっと別の何かを感じていた。言葉では形容し難いが、何かがズレている。その感覚が、あの日からずっとこびり付いているのだ。

「禪院家との間で、何かあったんじゃないですか？」

その違和感を拭うため、問う。

過去に何があったとしても、現代人の伏黒には何の関係も無い。無いけれど、呪いは廻るものだ。禪院の血を引く以上、その因縁が降りかからないとも限らない。

その問いに対し、直毘人は少しの沈黙の後、静かに口を開いた。

「娘と、同じ術式を持つ者がいた。死後呪物となり、貞盛はそれを取り込んだ」

「……それって……」

倫理を捨てた所業に、伏黒は言葉を失う。

人肉食も大概だが、問題なのはその被食者。同じ術式を持つという事は、少女と血縁関係にあった可能性が高い。

それを、取り込むなど。

伏黒は先祖に対する嫌悪感と共に、「何故そんな事をしたのか」という疑問を抱く。

人食の動機は飢餓や薬用、葬儀、趣向など幾つかあるが、呪術的には喰らった相手の力を取り込むためだ。

だが呪物を取り込むというのは、殆ど自殺に等しい行為である。そのまま死ぬか、肉体を乗っ取られて死ぬか。

そんな危険を冒してまで、やる価値があったとは到底思えない。その上貞盛は非術師とは言え呪術家系の出身で、虎杖のように呪いに無知だったとも考えにくい。

直毘人は表情を変えずに続ける。

「結論から言えば、何も起こらなかった。貞盛は頑丈すぎたのだ。呪物の毒にも、肉体の上書きにも耐えよった」

「……虎杖？」

伏黒の脳裏に過つたのは、宿讎の器となった同級生の姿。彼は宿讎の指を飲み込んだが、その猛毒に耐えて肉体の上書きも殆どなかった。

しかしそれは稀な事例であり、普通なら死ぬ。

なら貞盛もまた、虎杖のように常軌を逸していたのか？

その答えを、直毘人は淡々と明かした。

「虎杖：宿讎の器か、アレとは違う。どちらかという我真希に近い」

「天与呪縛、ですか」

「ああ。貞盛は、呪力を全く持たないフィジカルギフト。それ故呪物を食べても平気な身体だったようだ」

（……マジか）

現実味の無い話だが、確かに納得できる。

禪院真希は一般人並みの呪力しか持たない代わりに超人的な肉体を得たが、仮に呪力を全く持たないならそれ以上の恩恵が得られる。

そこまでいけば、呪いを取り込んでも問題ないのかもしれない。

……そんな人間が本当にいたのか、俄かには信じ難いが。

「まあ呪縛が強すぎて、何をやっても呪術は得られなかった訳だが」

「…無駄な努力でしたね」

同じ天与呪縛でもここまで考える事が違うのか、と伏黒は思わず苦笑する。

禪院真希は超人的な肉体で呪術師になったが、貞盛は逆に肉体を捨てても呪術師になろうとした。しかしその願いは叶わず、結局呪術は得られずに終わる。哀れと言えば哀れだが……何とも言えない気持ちになる。

その複雑な心境を知ってか知らずか、直毘人が伏黒に告げる。

「無駄ではない。彼が残した『呪い』は、確かに禪院家の礎になったからな」

「……え？」

伏黒が声を上げたのも当然である。

無意味どころか禪院の汚点でしかない。そう思う伏黒だったが、直毘人の言葉は予想外なもので。ここで伏黒は、ある結末に行き着いた。

…非道の果てに、何らかの実りを得ていたとしたら。それは、自分が良く知るものではないか？

伏黒の勘が理解するなど警鐘を鳴らす。

この感覚に、一度だけ覚えがあった。

津美紀が呪われた日。

何時も学校に呼び出されるのは姉で、自分が呼び出される事は無かった。あの日は珍しく、姉の担任から電話が掛かってきて、酷く慌てた様子だった事を覚えている。

聞く前から、汗が止まらなかった。自分が、自分でなくなるような気がして。

「貞盛に子が生まれてな。それが継いだ術式は求めた術式の派生であり…後に『十種影法術』と名付けられた。つまり娘の術式は、十種の原形になる」

「——っ!!」

落ち着けと言い聞かせるも、心臓が激しく脈打ち、呼吸は乱れるばかり。

何故こんなにも動揺しているのか。答えは分かっている筈なのに、それを認めたくないそんな伏黒の様子を見て、直毘人が楽しげに笑った。

まるで、出来の良い禪院が誇らしいように。

あるいは、呪いを背負う伏黒に憐れみを持って。

『禪院家に非ずんば呪術師に非ず、呪術師に非ずんば人間に非ず』
古くより続く絶対の思想。

その言葉を理解できなかったし、するつもりもなかった。

だが、今なら分かる。分かってしまう。

「人でなしの血族が禪院家であり、その罪業は決して消えぬ。その罪あつてこそ『禪院』なのだ」

十種影法術は、まごうことなき罪の証で。

伏黒はこの時初めて、己に流れる血の『呪い』を自覚した。

* * * * *

「……疲れた」

少女の領域展開は解け、月夜が明ける。

領域を解いた反動か、また緊張が解けたせいかわず疲勞を感じる。

反転術式で癒す事も出来るが、その疲れが妙に心地よくて、そのまま夏油の元へ歩み寄る。

夏油は仰向けで地面に倒れていた。その隣に腰を下ろして顔を覗き込むと、彼は静かに寝息を立てている。傷もしっかり、完治しているようだ。

「あはっ。酷い目にあつた」

夏油の額にデコピンを決めていると、肉体を再構築した真人がひよっこり顔を出した。相変わらず気楽そうな笑みを浮かべながら、少女の方へと歩み寄る。

そして少女の隣に立つと、興味深そうに夏油を見下ろした。

「どうすんの？」

「起きるまで待つ。真人は帰っていいんじゃないか」

「そっちじゃなくて、縛りだよ。夏油に何させるの？」

「あー、あつたねそんなの」

「軽いなあ…」

真人の呆れたような声を聞き流し、少女は少し考える。

特に何も考えずに飲んだ条件だったが、改めて考えると欲しいものは無いし何かをさせる必要も無い。だが縛りである以上、無下にするわけにもいかない。

「……うん、うん」

「なんか思いついた？」

「思いついた。でも教えない」

「えー君と俺の仲なのに。……ひよつとして、そういう話だったり？」

「そういう話、とは？」

「男女の「領域展」……逃げます」

そそくさと退場する真人をちらりと見てから、ロリコン疑惑をかけられた夏油に視線を向ける。

取り敢えず、少女は起きるまで待つ事にした。

太陽が沈み、西の空が赤みがかってきた。

夏油の隣に座ってそれを眺めていると、夏油の睨みが震える。ゆっくりと目を開き、ぼやけた視界の焦点を合わせようと何度か瞬きを繰り返す。

そして横にいる少女の存在を認識するなり、夏油はがばつと飛び起きた。反射的に臨戦態勢を取りかけたが、少女の言葉がその動きを止めた。

「…凄いと思った」

ぼつりと呟かれた言葉に、夏油は眉根を寄せる。

過程がどうであれ、結果は少女の圧勝。この状況で出る台詞では無い。

それでも少女は続ける。

「わたしにとって強さの基準は『とびぬけている事』だ。この世に存在するもので、他の追随を許さない程のものであれば、それは『最強』になる。だからお前は最強だ、夏油」

「…『ちが、う』」

ぎこちない夏油の言葉に、少女は一瞬きよとんとした。

夏油もそれは同じで、自身の口から出た言葉だと数瞬かかって気付く。

……何だ、これは。

「違わないとも。鍛え抜かれた肉体、取り込んだ呪霊の数、呪術への造詣の深さ、どれも研鑽の賜物だろう。何を否定する事がある？」

「『違う!!』」

夏油が、夏油傑の何かが、その拳を握らせる。

守りたい人がいた、守れなかったけど。守るべき人がいた、守らなかったけど。

脳に記憶が呼び起こされ、濁流のように溢れ出して。突然の現象に、彼も困惑していた。

「…無念、後悔って奴か」

どこか納得した様子で、少女は一人呟いた。彼は俯いたまま、胸の内から湧き上がる何かを抑えるのに必死で、何も返さない。

「なんか、安心したよ。強い奴は自分の弱さを理解している、それがあろうちは強くいられるのかな。…もう一度言う、お前は最強だ」

「『……そうか』」

それだけ言って、夏油は沈黙した。

握りしめていた拳を開くと紫色の爪跡が残されており、彼はそれを確かめるように指先でなぞる。

いつの間にか、辺りには夕闇が迫っていた。

「まーそんなものなくても強い奴は強いけど。宿儻とか」

「…ふ、台無しだよ」

彼は苦笑して、少女の方に向き直る。

先程までの不安定な状態から戻った彼は一度目を閉じ、深呼吸してから再び開く。

そしていつも通りの笑顔を浮かべたまま座り込み、両手を上げて少女に言った。

「煮るなり焼くなり、好きにしてくれ」

潔いのか諦めが良いのか、彼はあっさりと降伏を宣言した。夏油は微笑みを浮かべたまま、少女の沙汰を待つ。

少女はそれを確認した後、彼に一つの枷をかけた。

「夏油…家庭教師にならないか？」

* * * * *

伏黒はあれ以上長居する気にはなれず、禪院家を後にした。

なお五条はデジアド最終回しか視聴出来なかったが、問答無用で帰らされた。

残された直毘人は、一人酒を呷る。先程まで対面していた少年を肴にして。

禪院家の歴史を知る者は、家の中でもごく一部。恥ずべき歴史故に記録は破棄されており、当主から次期当主への口伝のみで伝えられてきた為だ。

その歴史の闇に葬り去られた事実の中に、件の呪詛師…の術式に関するものがある。

『全能の術式』…：御伽噺ではなかったか」

直毘人の口調は、少なくとも彼の高揚を示していた。

禪院の祖が欲しがったのは、その術式だったと伝えられている。それを手に入れるために、人すら捨てて。

そして、その血脈に刻まれたものは、消えていない。

「くくつ。あれは、禪院にこそ相応しい」

伏黒の十種影法術は、禪院家の相伝術式でも最良とされる。

汎用性の高さもそうだが、一番の理由は求めた術式に近いからだ。非道の副産物として生まれたそれは、禪院家の力として申し分ない。その原形は、なおさら貴い。それさえあれば、禪院は呪術界の頂点に君臨する。

そう確信する直毘人の顔は、愉悅に歪んでいた。

術式を手に入れる算段は付いてる。相手は人権など無い呪物で、そのうえ女。考えるまでもない。

直毘人は笑みを浮かべたまま、再び瓢箪を手取る。

——その直後、襖が開かれた。そこに居たのは、若い金髪の男。男は呆れたように息を吐きながら部屋に足を踏み入れ、胡坐をかいて座る。直毘人は突然現れた男に対して特に反応はなく、気にせず手にある酒を一気に呷る。

男はそれを一睨みした後、口を開いた。

「なんや？・話って」

彼の名前は禪院直哉。ぜんいんなおや次期当主と目される、直毘人の息子である。

直哉は当主と2人きりになる珍しい事態に多少身構えつつ、黙って返答を待つ。

直毘人は、直哉をチラリと見てから口を開いた。

「お前そろそろ、嫁をとれ」

「あゝ？」

禪院史上最速の親子喧嘩、勃発…!!